

3 ソ連邦との関係

1081 昭和11年1月8日 在アフガニスタン北田公使より
広田外務大臣宛(電報)

新疆南部へのソ連の影響力増大および在中國
英国参事官の新疆視察旅行に関する在アフガ
ニスタン英国公使の内話について

カブール 1月8日後発
本省 1月9日前着

第四號

(引用番號脱?)

當地英國公使ハ「タイヒマン」(在支那参事官)及「クロ
バー」(喀什噶爾總領事)ハ烏魯木齊ニテ支那側ト印度通商
復活ニ付交渉シ満足ナル結果ヲ得タル模様ニテ「タ」参事
官ハ今頃「デリー」ニ着スル頃ナルカ其ノ後支那側ハ新タ
ニ出入國規則ヲ出ス(印度新聞報道ニ依レハ英國ハ支那中
央政府ニ對シ之カ撤回又ハ修正方交渉中)等誠意モ疑ハシ
英國ハ本貿易ヲ重要視スルモ新疆ノ蘇聯側ニ對シ政治經濟
上壓迫ヲ加ヘル方法無ク軍事上モ永續シテ武器援助ヲ爲ス

在中華民國

特命全權大使 有吉 明(印)

外務大臣 廣田 弘毅殿

「タイチマン」ノ「ギルギット」到着ニ關スル件

一月八日「デリー」發「ロイター」電ニ依レハ客年九月
中旬北平出發新疆旅行ノ途ニ上リタル在支英國大使館参事
官「サー、エリック、タイチマン」ハ迪化、喀什噶爾ヲ經
「カラコラム」山脈ヲ超^(越)ヘ同日「カシミール」ノ「ギルギ
ット」ニ到着シタル由ナルカ同参事官ハ歸英前「デリー」
ニ於テ報告書ヲ作成其ノ中ニ於テ特ニ英國及印度ノ新疆貿
易ニ多大ノ打撃ヲ與ヘツツアル「ソ」聯邦勢力ノ伸張、目
下印度政廳及支那側トノ間ニ交渉中ノ印度商人ノ差別的入
國制限問題、迪化ニ領事館開設ノ必要等ヲ強調スル趣ナリ
「タイチマン」カ從者五名(支那人「コック」、「ボーイ」各
一人蒙古人自動車運轉手三人)ヲ伴ヒ「フォード、トラッ
ク」二臺ヲ以テ北平ヲ出發セルハ客年九月十五日ニシテ其
後旅行ヲ續ケ白靈廟ヲ經十月四日 Edsh Gohニ同月二十二
日哈密ニ二十九日迪化ニ着シ同地ニテ喀什噶爾ヨリ先着ノ
「グローヴァー」總領事ト會シ共十一月十四日迪化出發

ハ困難ナリト内話セリ

「ヤールカンド」、和闐間ノ東罕軍ハ馬忠英(莫斯科監禁中)
ニ五名ノ使ヲ派シ蘇聯側トノ平和條件ノ承認ヲ求メタルカ
目下「エミール、ホタン」ノ游軍ト時々緩慢ニ交戦中ナリ
蘇聯側カ此ノ方面ニ力ヲ入レ始メタル一原因ハ支那共產軍
ノ根據地カ青海ニ移ル場合南新疆ヨリモ聯絡路ヲ確保シ置
カン爲カト思ハル「ヤールカンド」、喀什噶爾ヨリノ情報
ニ依レハ各地ノ政權ハ既ニ蘇聯ノ手ニ歸シ回教軍ハ解隊シ
東「トルキスタン」ノ獨立ハ既ニ事實トナリ居レリ獨逸公
使ノ談ニ依レハ伯林ニテハ蘇聯ハ日英ヲ刺戟セサル爲此ノ
際表面的宣言ハ避クルモノト觀測スル趣ナリ
前電通リ郵送セリ

1082 昭和11年1月10日 在中國有吉大使より
広田外務大臣宛

在中國英国参事官の新疆視察旅程および作成
中の報告書における主要点について

大第一八號 (1月17日接受)

昭和十一年一月十日

十二月初旬喀什噶爾着更ニ「カラコラム」山脈ヲ超^(越)ヘ今般
「ギルギット」ニ到着セルモノニシテ北平、迪化間四十四
日迪化「ギルギット」間五十五日計九十九日ヲ要シタル理
ナリ
右報告ス

本信寫送付先 北平 天津 南京 在滿大使 「ソ」英
國 「アフガニスタン」

1083 昭和11年1月15日 在アフガニスタン北田公使より
広田外務大臣宛(電報)

新疆からソ連勢力駆逐のため新疆回教徒自治
運動家がわが国の支援要請について

付 記 昭和十一年七月三日付、東亜局第一課作成
「トウフィック・エル・シエルフ」、有田大臣
會見

カブール 1月15日後発
本省 1月16日前着

第七號(極秘)
往電第一〇五號「エミール、ホタン」朝倉ヲ介シ極秘來訪

左ノ通り語レリ

(一)現在新疆ニハ哈密附近ニ「ヨルケス、ベイキ」軍二、三千人(町ハ蘇聯側占領)「アルタイ」ニ「シヤリフ」軍一萬人、和闐沿道ニ東軍六、七千、土民兵五千(蘇聯ハ妥協ニ努力中ナルモ未タ充分目的ヲ達セス)ノ外ニ「エミール」ノ弟ノ軍四千(但シ小銃六百)等ノ反蘇軍アルモ互ニ聯絡無シ「マフムード」軍ハ二千ニ減少シ已ムナク敵ト苟合セリ蘇聯ハ二十ヶ月前白露兵ト偽稱シ真正ノ赤衛軍八百ヲ阿克蘇ニ入レ其ノ後之ヲ伊犁、烏魯木齊ニ移セリ

(二)和闐ニテハ東軍及「エミール」側軍權行政權ヲ分ケ目下紛争無シ東軍兵ハ將來結局歸郷スヘク自分等ハ管内ヨリ五、六萬ノ兵ヲ作り得、英國ハ武器援助ヲ約セルモ未タニ實行セス今後或ハ一層接近シ來ルヘシ蘇聯ニハ尙更援助ノ事實ナシ當國ハ頗ル友好的ナリ

(三)自分等ハ將來喀什噶爾ヲ經テ北上シ蘇聯ニ當ル計畫ナルカ英國ニ隸屬ノ意思無シ、支那主權下ニ廣汎ノ自治ヲ得ル解決策ハ反對ニアラス全新疆上下ノ對日感情ハ頗ル好カリシ上滿洲國獨立後ハ益々信頼ヲ表セリ蘇聯ノ驅逐ニ

此ノ問題ハ早晚解決サル(回教徒獨立ヲ暗示ス)ヘキカ自分ハ日本ト共ニ解決セラレンコトヲ希望シ居タル次第ナリ、

(大臣ノ問ニ對シ)英國カ西部新疆ノ獨立ヲ希望シ居ルハ露西亞ヲ恐レ居ル爲ニ非ス英國自ラノ進出ヲ計ラントシ居レリ。又日本カ大陸政策ニ出ツル爲ニ二ツノコトヲ缺ク即チ一ハ亞細亞ノ科學的研究(他ノ諸國ハ數百年前ヨリ其ノ研究者ヲ有シ住民自身ヨリヨク知り居ルコトアリ)ニハ公式外交ト併行スル「プライヴェー・ト・デイプロマシー」(主トシテ商賣人ニ行ハシメルモノ)是ナリ

(二)大臣ハ日本ニ於テ新疆ニ關スル「インテレスト」アルモ遠隔ノ地ニモアリ目下ノ所具體的工作ヲ考ヘ居ラス、今回御來朝ノ際ニ具體的効果ナカリシニセヨ切角御渡來セラレ友人モ作ラレタルヲ以テ今後トモ日本ニ好意ヲ持タレンコトヲ希望ス

二、右會見後「ト」ハ係官ニ對シ新疆工作ハ速ニ行フヲ要スルモノナレハ自分ノ日本ニ對スル友情ハ變ラス將來提携ノ希望ハ依然タルモ政治的必要ニ迫ラレ他國ト手ヲ握ラ

ハ新疆ノ兵士自ラ當ルヘク日本ヨリハ外交上ノ聲援ト武器供給ヲ仰ケハ充分ナリ蘇聯ハ日本ト戰ヘハ必ス革命起ルヲ知り日本ノ「プロテスタ」ハ非常ニ效果アリ自分等ハ差當リ小銃五千又ハ輕機關銃百ヲ必要トシ阿富汗仲介購入ノ便法モアルヘシ云々

尙「ネデイム」ニ關シ同人ハ和闐ニテモ政治上功勞アリ豫メ日本官憲ト聯絡取レスニ渡日セシカ目下君府ニアリ當地ニ歸レサル由ナリ
露及伯ヲ除ク在歐米各大使、瑞典、波斯、孟買、甲谷陀ニ暗送セリ

(付記)

「トウフイク・エル・シエリフ」、有田大臣會見

(一一、七、三 午後五時)

一、談話要點(會見時間約二十分)

(一)「トウフイク」ヨリ自分ハ大ナル期待ヲ以テ來朝シタルモ三ヶ月無爲ニ過シ誠ニ残念ナリ、日本ハ只今中亞方面ニ具體的仕事出來サルコトヲ了承セリ、自分ハ將來トモ日本ト提携ヲ希望ス。新疆省ハ中亞ノ鍵ナリ、

サルヲ得サルヘシト如何ニモ惜シ氣ニ語り居レリ

又關東軍トノ連絡ニ未練アリ氣ナリシヲ以テ私見トシテ關東軍ハ新疆甘肅ニ關スル情報ニ興味アルモ目下工作ニ乗出ス氣ナキカ如キ實情ヲ説明シ置キタリ

「ト」ハ今直ニ入新スルヲ好マス先ツ使者ヲ出シ興黨ト連絡セシメ現下ノ情勢確メノ上入新ノ希望ノ由ナリ
旅程(滿洲ニ立寄ルヤ否ヤモ)目下考ヘ來週通報越スヘシ。

1084 昭和11年1月27日 在南京須磨總領事より
広田外務大臣宛(電報)

広田三原則承認問題に關連して在中國ソ連大使が日中防共提携に懸念表明について

南京 1月27日夜発
本省 1月27日夜着

第五九號

二十七日「ボゴモロフ」ハ本官ノミヲ午餐ニ招待シ實ハ議會演說ニ依リ三原則カ支那側ノ認ムル所トナレルヲ知りテ驚キ殊ニ果シテ然ラハ第三項ハ日支間ニ同盟様ノ關係ヲ前提トセスハ實行シ難キモノナル點ニ憂慮ヲ禁シ得サリシカ

幸ニシテ二十三日外交部ヨリ否認セラレ安堵セル譯ナル處尙自分ノミナラス一般外國側ハ新政府ハ六人迄日本出身者ヲ有シ餘リニ親日的ナリト見居リ支那ハ何等カ世界ニ對シ「クーデター」様ノ新政策ニ出テ日本ト握手スルニアラスヤトサヘ考ヘ居レリト何時ニ無ク率直ニ本官ノ意見ヲ求メタルニ付例ノ通り我方ノ立場ヲ強ク申聞ケ置キタルカ三原則ニハ尙懸念ヲ去リ得サル様子ナリ

1085 昭和11年1月30日 在綏芬河興津(良郎)領事代理より 広田外務大臣宛(電報)

金廠溝事件の発生とその誘因について

綏芬河 1月30日發 本省 1月31日前着

第一〇號

本官發滿宛電報

第一三號

當地特務機關ヨリ得タル情報ニ依レハ密山縣金廠溝(第二二號界標西南八杆)ニ在ル滿洲國國境監視隊ノ滿人將校以

大臣、哈爾賓へ轉電セリ

1086 昭和11年1月31日 在中国有吉大使より 広田外務大臣宛

日中防共提携を阻止するため在中国ソ連大使が策動しているとの情報について

機密大第七〇號 (接受日不明)

昭和十一年一月三十一日

在中華民國特命全權大使 有吉 明

外務大臣 廣田 弘毅殿

對支三原則ト在支「ソ」聯邦大使ノ策動說ニ關スル件 我方ノ對支三原則ニ對シ「ボゴモローフ」「ソ」聯邦大使カ極度ニ神經ヲ惱マシ居ル趣本月末在南京須磨總領事ヨリ閣下宛電報アリタル處諜報ニ依レハ之ヨリ先「ボ」大使ハ「客年末張群外交部長ニ對シ北支ニ於ケル對日共同戰線ノ必要ヲ説キ軍事協定ノ締結ヲ勸メ之ト交換的ニ新疆ニ於ケル活動ヲ中止シ又支那商人ニ對シ外蒙ノ國境ヲ解放スヘシト提議シ」之ニ對シ張群ハ何等答フル所無カリシ由

「更ニ一月十四日張群ヲ往訪對支三原則問題ニ關シ質問シ

下一〇八名ハ昨二十九日午前三時兵(變)ヲ起シ兵舎ヲ燒拂ヒ蘇領へ遁走日系軍官三名其ノ場ニ燒死一名ハ行衛不明トナリタル趣ニシテ當地外交部辦事處ハ同人等ヲ犯罪者トシテ身柄引渡方蘇聯領事ニ要求スルコトニ決定セラレタリ 右ニ關シ當地滿軍國境監視隊長ハ本日特務機關長ニ對シ本件ノ誘因ト思ハルル心當リトシテ

(一)日系幹部ニ言動粗暴ノ者アリ日頃滿人ノ反感ヲ買ヒ居リシコト

(二)滿人幹部中ニ反日滿思想保持ノ嫌疑アル北平大學出身者アリシコト

(三)昨年來蘇領へ脱走セル滿軍將兵(本月十日哈府機關紙參照)密ニ事件ヲ煽動ノ疑アルコト

(四)滿人ノ大部分カ回々教徒ナリシニ拘ラス新年ニ豚ヲ與ヘタルコト

等ヲ述ヘ居タル處前記(一)ハ日系軍官ノ通弊トシテ夙ニ憂慮セラレツツアル所ナルカ本日本官ハ特務機關長ニ對シ之カ對策トシテ露國カ革命直後ノ人心動搖期ニ適用シテ成功シタル方法即チ軍隊ニ常識アル文官政治部員ヲ配屬スルコトヲ滿軍ニ適用方私見トシテ開陳シ置キタリ御參考迄

若シ南京ニシテ東京トノ間ニ共同赤化防衛ノ如キ軍事協定ヲ締結シ又若シ日本カ外蒙ニ對シ軍事行動ヲ採ルニ於テハ「ソ」聯邦ハ共同赤化防衛ノ故ヲ以テ支那ヲモ敵トセサルヲ得サルヘシト注意ヲ喚起シタル由ニテ

1087 昭和11年2月1日 在滿州國南大使より 広田外務大臣宛(電報)

金廠溝事件発生に関する関東軍司令部の発表

について

新京 2月1日夜發 本省 2月1日夜着

第八五號

露發貴大臣宛電報第八四號ニ關シ

付記 昭和十一年二月四日付移牒、永見支那駐屯軍參謀長より杉山參謀次長宛電報

ソ連の工作が新疆方面から外蒙・綏遠へと重点を変えつつあるとの情報について

機密第一〇五號 (2月12日接受)

昭和十一年二月三日

在天津

總領事 川越 茂(印)

外務大臣 廣田 弘毅殿

蘇聯ト新疆省ノ密約締結説ニ關スル件

中國政府カ蘇聯トノ合作條件トシテ新疆省ニ於ケル蘇聯勢力設定ヲ默認スル密約締結セラレタル件ニ關シテハ既報ノ處ナルカ最近當館密偵カタス通信天津駐在員ヨリ牒報セルトコロニ依レハ同支社ハ本月十八日附モスコ―秘密「ニュース」トシテ蘇聯政府ト新疆省政府ハ客月一日別紙ノ如キ新蘇密約ヲ締結セリトノ通信ヲ受接セリトノ趣ニテ右ハ最近來新蘇間ニ合作工作直接進捗セラレアルモノト認メラレ相當注目ニ値スト

尙密約ニ基キ蘇聯ヨリハ新疆省顧問トシテ已ニ三十餘名ノ

關東軍司令部ニ於テハ二月一日午前左ノ通り發表セリ
去ル廿九日滿軍密山國境監視隊ノ一部カ兵變ヲ起シ遁走セリトノ報ニ接シタルカ豫知シアリシヲ以テ機ヲ失セス國境監視隊ハ第一線ニ必要ノ最少限ノ兵ヲ殘置シ之カ包圍捕獲ニ努メ一方日本軍ノ一部モ出動。皮。溝。附近ニ向ヒ平陽鎮及半截河ニモ一部出動綏芬河ヨリ北方國境ヲ封鎖ス
卅日午後一時日滿聯合討伐隊ハ二十一號界標附近ニ於テ逃亡匪ト交戦セシカ兵匪ハ蘇聯内五百米ニ遁入セルヲ以テ日滿軍ハ追撃ヲ中止シ國境ヲ監視シアリ(中略)此ノ戰鬪ニ於テ兵匪ノ殘置セル死體中ニ蘇聯兵アリ又蘇聯用防毒「マスク」ヲモ鹵獲セルヨリ見テ蘇聯側ノ煽動ニ依ルモノナルコト明瞭トナレリ(以下略)
露、哈爾賓、綏芬河へ轉電セリ

1088 昭和11年2月3日 在天津川越總領事より
広田外務大臣宛

ソ連・新疆省政府間においてソ連人顧問の省
政府招聘など密約成立の情報について

人選ヲ經此等ハ二月一日迄ニ新疆省ニ派遣セラルヘシト
右何等御參考迄報告ス

本信寫送附先 在支大使 北平 上海 南京 漢口 廣
東 福州 厦門 青島 濟南 奉天 哈
爾賓 吉林 間島 在滿大使 關東局總
長 張家口

(別紙)

新蘇條約

中國新疆省政府ト蘇聯邦共和國ハ極東平和ヲ謀リ第三國際ノ經濟、軍事、政治的一切ノ權益ニ對スル侵犯ヲ防止スル目的ヲ以テ左ノ條約ヲ締結ス

第一條 新蘇兩政府ハ一切ノ政治、軍事、經濟各項ノ建設ヲ維持スル見地ヨリ新疆省政府ハ蘇聯政府ヨリ專門技術顧問各五名ヲ招聘シテ專門委員會ヲ設立ス

第二條 新疆省ニ對スル第三國ノ侵入ヲ許サス

兩政府ハ共同シテ省内ノ治安ヲ維持スル責任ヲ有ス

第三條 新疆省一切ノ建設費用ハ凡テ蘇聯政府ヨリ供給ス
但シ蘇聯政府ハ新疆省ノ主權ニ對シ干涉ヲ許サス

(欄外記入)

第四條 新疆省政府施行ノ一切建設ニハ蘇聯人材及原料ヲ用フ

第五條 新疆省政府カ外域ニ向ツテ推進ノ場合ハ蘇聯政府ハ軍事、政治、經濟一切ノ協助ヲナスノ義務アルモノトス

第六條 新疆省迪化ヨリ綏遠ニ至ル鐵路建設權ハ蘇聯政府ニ讓與シ十五年後ハ無代價ニテ新疆省政府ニ此レヲ返還スルモノトス

第七條 新疆省政府ニシテ獨立或ハ建國ノ運動アル時ハ蘇聯政府ハ其ノ協助ヲナス

第八條 軍事協定及軍事建設ハ別ニ規定ス

第九條 蘇聯政府ヨリ貸與スル建設費額ハ專門委員會ニ於テ決定スルモノトス

第十條 本條約ハ一九三六年一月一日署名後效力發生ス

「以上」

(欄外記入)

客年十月天津ヨリ此ノ種情報アリ、昭九、一〇ノモノナリトテ、

軍事協定メキタルモノ、本件ハ右全様眞疑不明ナルモ内容ハ大体アリ得ヘキコトナリ

(付記)

天津 天津 參謀本部 着

最近ニ於ケル蘇邦ノ對支工作ニ關シ當部ノ綜合的觀察左ノ如シ

- 一、新疆ニ對スル蘇邦ノ積極的工作(五千萬元借款說軍備援助說等)ニ就テハ昨年以來喧傳セラレアル所ナルカ本年ニ入り對支工作ノ重點ハ新疆ヨリ北支ニ指向シ北滿ニ於ケル外蒙工作ニ策應セシメントスルノ傾向漸次濃厚トナリツツアリ、其顯著ナル例ハ
 - (一)上海ニ在リシ共產黨中央政治局ノ北支移轉(下記第三項(一)犯人逮捕ニ依リ其存在ハ確認セラレアリ)
 - (二)河北軍事委員會北支設置設
 - (三)天津ニ蘇邦金融機關ノ新設
 - (四)蘇邦側新聞ヲ新ニ天津ニ設置スルノ計畫進捗中ナルコト等ニシテ以上ハ昨年末ヨリ一月末ニ亘リ急速ニ

實現セントシ其運ヒニ向ヒツツアリ、尙哈爾濱及上海方面ヨリ天津ニ潛入セル赤色露人ハ北鐵讓渡頃以來三百(從來ハ二百)ニ達スルハ彼等活動ノ積極化ヲ裏書スルモノナリ

- 二、過去ニ於テ一時中絶シアリシ支那民衆ニ對スル赤化工作積極化セル傾向尠カラス前掲ノ外其次ノ如シ
 - (一)河北省南部順德東南地區一帶ニ中國區共產政府設立
 - (二)昨年末以來北平、天津ニ於テ屢々共產黨各種委員會ヲ開催セル事實
 - (三)昨一日開校セル天津北洋工學院ニ於ケル共產系學生ノ不穩行動等之ナリ
 - 三、以上ニ加フルニ新疆ヨリ北支ニ進出スル立脚地トシテ對綏遠工作次ノ如ク活潑トナリタルコト
 - (一)舊曆大晦日ヲ期シ共匪ハ綏遠省占領ノ爲密カニ武器彈藥ヲ綏遠蒙古ニ集メ假令之ニ失敗スルモ傳作義及羽山少佐ヲ暗殺セントスル中國共產黨ノ陰謀
 - 陽曆一月十三日各種多數ノ武器彈藥ノ外其幹部ヲ逮捕セシ事件アリ(詳細ハ後報ス)
 - (二)此日對日宣戰ヲ呼號シ傳作義威嚇ノ件別電(第二九三

號參照)ノ如シ

(三)張家口德華洋行カ最近ニ於テ數回執(電報)ナル綏遠進出策動ヲ始メ出シタルコト

四、之ヲ要スルニ蘇邦ノ對支政策ハ確ニ一大轉機ヲ來シタルモノト認メラルルモノ多ク、以上彼ノ極東政策判斷ノ好資料ナルノミナラス、昨夏以來傳ヘラレアル蘇支密約說(七月一日締結セリト云フモノ)及國民政府ノ容共政策說ヲ立證スルモノトシテ我對蘇支情勢判斷上極テ重要ナル要件タルヲ失ハス

以上諸情況ハ尙調査ヲ進メツツアルモ取敢ス報告ス

1089 昭和11年2月12日 在滿州國南大使より 広田外務大臣宛(電報)

金廠溝事件に關シ滿州國外交部がソ連側へ脱走兵の引渡しを要求しソ連側の事件関与を厳重抗議について

新京 2月12日後発 本省 2月12日夜着

第一一四號

往電第一〇三號ニ關シ

滿州國外交部ニ於テハ金廠溝事件ニ關シ既ニ北滿特派員ヲ通シ在哈爾濱蘇聯總領事ニ對シ再三口頭ヲ以テ抗議スル所アリ(之ニ對シ先方ハ滿側抗議ハ虛構ノ事實ニ基クモノナルカ故ニ受理スルヲ得ストノ態度ニテ應酬セル由)更ニ二十一日大橋哈爾濱ニ赴キ書面ヲ以テ抗議ヲ提出セルカ其ノ要旨ハ先ツ一月二十九日兵變以來二月一日ニ至ル國境衝突事件ヲ略述シタル後左ノ點ヲ力説セルモノナリ

- (一)脱走兵ハ重大ナル犯罪行為ヲ敢テセル刑事犯人ナルヲ以テ速ニ引渡サレ度キコト、若シ蘇側ニ於テ之ヲ拒絶スルニ於テハ蘇側カ從來表明セル隣接國トノ和平關係維持ノ誠意ナルモノハ實在セサルコトノ證明ト考ヘラレ又今次事件ノ背後ニ蘇聯ノ煽動聯絡アリトスル滿側信念ヲ裏書スルノ已ムヲ得サルヘキコト
- (二)蘇側カ脱走兵ノ武装解除、抑留等ヲ怠リシノミナラス蘇領ヲ滿洲國攻撃ノ根據地トシテ使用セシメ且蘇聯兵自ラ攻撃ニ参加セル重大ナル不信行為ニ對シ蘇聯政府ノ責任ヲ問ヒ責任者ノ處罰及損害賠償ヲ要求スルコト
- (三)日滿側ハ作戰ノ不利ヲ忍ビテ國境線ヲ嚴守シ蘇側ハ自方

ノ越境ノ證據ヲ湮滅スルニ汲々タリシニモ拘ラス蘇側カ
日滿軍ノ越境ヲ主張シ居ルハ事實ヲ故意ニ曲歪セル強辯
ニアラサレハ蘇側ノ國境線認識缺除ニ基クモノト謂フヘ
ク國境線ハ明確ニシテ査定ノ要ナシトスル蘇側主張カ誤
ニシテ國境ハ條約上又事實上未確定ナリトスル滿側主張
ノ正當ナルヲ示スモノト謂フヘク滿蘇間ノ和平關係ヲ維
持シ此ノ種不祥事件ヲ防止スルノ保障トシテ速ニ國境線
査定ノ緊要ナルヲ指摘ス
露、哈爾濱へ轉電セリ

1090 昭和11年2月12日 在中國若杉臨時代理大使より
広田外務大臣宛

英ソ間において中国での勢力範囲確定につき
了解成立との情報について

機密大第九九號 (接受日不明)

昭和十一年二月十二日

在中華民國

臨時代理大使 若杉 要

外務大臣 廣田 弘毅殿

ハ自國ノ利益ヲ防衛スル爲ニハ他國ヲモ利用スルコトアル
ヘシト答ヘタル事乃至最近ノ英「ソ」接近傾向等ニ鑑ミ單
ナル風評トシテ看過スルヲ得サル筋モアリ且下確カメ中ナ
ルモ不取敢右報告ス

本信寫送付先 北平 南京 在滿 「ソ」

1091 昭和11年2月14日 在ハイラル米内山(庸大)領事より
広田外務大臣宛(電報)

オラホドカにおける関東軍および満州国軍と
外蒙部隊との武力衝突について

ハイラル 2月14日發
本省 2月14日着

第一〇號

本官發滿宛電報

第一四號

往電第一三號ニ關シ

當地部隊參謀ノ談ニ依レハ十二日朝日滿軍(日本軍一個中
隊參加)ヲ以テ「オランホトック」ノ外蒙哨所攻撃ノ際敵
ノ砲彈我裝甲自動車ニ命中將校一名戰死一名負傷其ノ他多

支那ニ於ケル勢力範囲ニ關スル英「ソ」間諜解
成立説ノ件

在支「ボゴモロフ」「ソヴイェト」大使及「カドガン」
英國大使トノ間ニ支那ニ於ケル勢力範囲ニ關シ談合行ハレ
ツツアルヤノ情報客年十二月初頃ヨリ傳ヘラレ居タルカ最
近宋子文及孔財政部長側近ノモノヨリ漏レタル情報ナリト
テ傳ヘラルル所ニ依レハ此種兩大使ノ間ニ
「英國ハ外蒙古ニ於ケル「ソ」聯邦ノ行動ヲ阻止セス
「ソ」聯邦ハ新疆西南部、西藏及四川ニ於ケル活動ヲ中
止ス

三兩國ハ相互ニ夫々前記諸地方ニ於ケル相手國ノ行動ヲ尊
重ス

トノ未タ調印ト迄ハ行カサルモ相當程度ノ諒解成立セル趣
ナリ

右カ單ナル言宣^(マツ)乃至流説ニ止ルヤ或ハ多少ノ據所アルヤハ
不明ナルカ客秋在北平英國大使館參事官ノ新疆旅行ヲ容認
セル「ソ」聯邦カ在莫斯科東朝及東日特派員ノ同方面ノ旅
行ヲ拒否セル事、本件ニ關シ館員ヨリ夫トナク質シタルニ
對シ「スピリワネク」「ソヴイェト」總領事カ「ソ」聯邦

數ノ死傷者ヲ出シタル趣ナリ其ノ後輕爆撃機二機飛來爆彈
六個ヲ落シタルモ死傷ナシ軍側ニ於テハ事件ノ重大ヲ避ク
ル意味ヲ以テ同地方ニ少數ノ蒙古軍警備兵ヲ殘シ日滿(軍)
ハ引揚クルコトトシタル趣ナリ初メ衝突ノ際外蒙側飛行機
(航空會社旅客機)カ同地附近ニ到着スルヤ之ヲ見テ外蒙飛
行機カ直ニ飛來シ來リタルモノノ如ク國境線ニ沿フテ爆彈
ヲ投下シ國境ヲ越ヘテ滿洲國領ニハ侵入セサリシ由ナリ
是等ノ情報ヲ綜合スレハ外蒙側ハ外蒙自身ニテ考フル所謂
國境線ヨリ侵入セル日滿軍ニ對シテハ猛烈ニ抵抗モシ又攻
撃モシ來レルモ夫レ以上滿洲國領ニ侵入シ來ラス所謂彼ノ
不脅威、不可侵ノ原則ヲ現實ニ實行シツツアルモノノ如シ
今回ノ事件ニ依リテ見ルモ野砲、爆撃機等ヲ國境地方ニ準
備シアリ外蒙兵モ相當頑強ニ抵抗シタル趣ニテ日滿軍ニ於
テ若シ積極的ニ侵入セントスルニ於テハ相當ノ犠牲ト事件
擴大ノ危険ヲ覺悟セサルヘカラサル次第ト存スルモ當地軍
側ニテモ既ニ該地邊境出動ノ日滿軍ヲ歸還セシムルコトト
シタル趣ニ付事件ハ之レ以上擴大スル惧ナカルヘシト認メ
ラル

1092

昭和11年2月17日 在滿州国南大使より
広田外務大臣宛(電報)

オラホドカでの武力衝突におけるソ連軍の戦
闘参加を裏付ける事実関係報告

新 京 2月17日前発
第一二八號 本省 2月17日前着

海拉爾發本使宛電報第一三號ニ關シ

軍ニ於テ入手セル情報ニ依レハ十三日「オラホドカ」附近
戦闘ニ於テ

一、蘇聯系爆撃機(翼ニ赤星ヲ附シ居リ「P」三型ト認メラ
ル)カ午後二時頃「ボイル」湖西側ヲ「アツルスム」
附近迄飛來シ我軍ニ對シ數十發ノ爆彈ヲ投下セルコト

二、外蒙部隊ノ小型戦車五臺、装甲自動車三臺滿領内十軒ノ
地點迄侵入シ來レル處其ノ行動振ヨリ察シテ蘇聯人カ操
縦シ居ルモノト認メラレタルコト

三、我軍ノ鹵獲セシ火炮カ「キエフ」工場一九二二年製ニシ
テ其ノ指揮並ニ射撃ノ巧妙ナル點ヨリ見テ蘇聯人カ指揮
シ居リシモノト認メラルルコト

アルヘシ

(別電)

カブール 2月25日後発
本省 2月26日夜着

第一九號(極秘)

新疆内部モ冬越後活動ヲ豫期サレ最近哈密ニテ「ホジャニ
アス」ノ子父ノ命ニ反シ烏魯木齊側ト戦ヒ成功セルニ動か
サレ「ニアス」モ秘密ニ喀什噶爾、「ヤールカンド」ノ
「マフムード」軍ニ反蘇行動準備東軍及和闐トノ提携方
ヲ命シ大衝動ヲ與ヘ蘇支側ハ之ニ備ヘル爲「ヤールカンド」
ヨリ兵ヲ喀什噶爾ニ集中セリ和闐(東)軍ノ妥協モ近ク進行
スヘク右大同團結モ不可能ニモアラサルカ如シ在于闐東軍
軍ト甘肅中西部ノ東軍首領「マー、ウー、パン」トハ元來
甚シク不和ナリシカ近時後者ヨリ接近ノ態度ヲ示シ來レリ
「アミール、ホタン」及當國總理大臣ノ内話ニ依レハ英國
ハ未タ何レニモ援助ヲ與ヘサルモ若シ東軍和闐ト和協セハ
動クモノト認メ得ル徵候モ著シキモ他方同國ハ日本ノ北支
進出ノ此ノ方面ニ對スル影響如何ニ判断斷ニ迷ヒ懷疑的ト

等ノ事情ニ依リ外蒙部隊内ニ蘇聯軍人ノ参加シ居リタルコ
トハ疑ナキモノト認メラルル趣ナリ

海拉爾、露ヘ轉電セリ

1093 昭和11年2月24日 在アフガニスタン北田公使より
広田外務大臣宛(電報)

新疆におけるソ連の軍事活動と金廠溝事件と
の関連性につき注意方意見具申

別電 昭和十一年二月二十五日發在アフガニスタン
北田公使より広田外務大臣宛第一九号
新疆方面軍事情勢につき報告

カブール 2月24日後発
本省 2月25日前着

第一八號(極秘)

蘇聯邦ハ新疆ニテ別電ノ如ク軍事的勢力ヲ増ス必要ニ迫ラ
レ居ルモ國際關係モアリ其ノ人員ハ主トシテ反日滿支那兵
等ヨリ仰クヲ最便利トスル事情ニアル處今般ノ滿洲國兵ノ
脱走アリ異常ノ注意ヲ拂ヒ居レルカ將來ノ爲我方トシテハ
右脱走ノ原因殊ニ蘇側トノ聯絡ノ有無ヲ明カニサルル必要

ナリ居ルヲ以テ或ハ蘇支側ト接近スルヤモ知レスト云フ蘇
聯邦ハ兵力増加ノ舉ニ出ツヘク和闐情報ニ依レハ北部地方
ニハ密ニ一部赤軍ヲ入レ始メタリト云フ新疆諸部都市ト蘇
聯間ノ行通聯絡モ事實ナリ
前電ノ通り郵送セリ

1094 昭和11年2月28日 在滿州国南大使より
広田外務大臣宛(電報)

關東軍の了解・後援に基づく新疆・青海方面
への調査員派遣状況について

新 京 2月28日後発
本省 2月28日夜着

第一六五號(部外絶對極秘)

本使發南京宛電報第一號ニ關シ
軍ヨリノ内報ニ依レハ目下關東軍トノ了解若ハ其ノ後援ノ
下ニ支那輿地及邊境方面ノ調査ニ從事シ居ル者ハ左ノ通ニ
シテ何レモ西蘇。尼。特。ヲ起點トシテ最近出發セルモノノ趣ナ
リ
一、笹目某ナル者單獨ニテ寧夏、甘肅、青海經由西藏ニ向ヘ

リ
ニ印度人「ナイル」及大迫武夫(現役將校)ナル者新疆ニ向
ヘリ

三、日滿教化聯盟員名義ニテ山本光治ナル者ノ一行七名(滿
鐵關係者)新疆ニ向ヘリ
尙、及三ニ付テハ地方官憲トノ間ニ了解アル由ナルカニ大
迫ハ蒙古人ト自稱シ居ル趣ナリ
支、南京ヘ轉電セリ

1095 昭和11年3月18日 在漢口三浦総領事より
広田外務大臣宛(電報)

中ソ提携交渉のため陳果夫江蘇省主席が訪ソ
したとの情報について

漢口 3月18日後発
本省 3月18日夜着

第五九號(極秘)

長沙發本官宛電報

第一一號

大臣ヘ轉電アリタシ

(イ)孫文「ヨツフエ」協定ヲ復活センコトヲ提議シ其ノ交
換條件トシテ

(ロ)今後蒋介石政權ニ物質的援助ヲ與ヘ

(ハ)極東共產軍並ニ中國共產黨ヲシテ抗日一點張ニ邁進セ
シメ

(ニ)支那本部ニ於ケル赤化宣傳ヲ中止セン

コトヲ申入レ來レル爲陳果夫ハ現在莫斯科ニ於テ蘇當局
ヨリノ申入ニ係ル蘇支提携ノ具体案ヲ確メ蒋介石ニ取次
キツツアリ
其ノ中ニハ

(A)國民黨々是中ニ共產黨政綱ノ一部ヲ取入ルルカ或ハ國
民黨々綱中共産黨々綱ト共通ノ部分ヲ擴張實施シテ或
ル緩和セラレタル容共政策ヲ採用セシムルコト

(B)綏遠西套蒙古甘肅ニ於ケル治安ノ確保上必要ナル互助
協定ヲ結ヒ必要ニ應シ蘇軍ノ出動ヲ容認スルコト

(C)蘇聯ハ右地域以北ノ開發及領土主權ノ尊重ヲ確約スル
ト共ニ中國内政問題ニ波及スルカ如キ行動ハ一切採ラ
サルヘキコト
等ノ條項アリテ此ノ際南京側トシテ容易ニ受入レ難キ

第一一號

何健ハ本十七日顧問唐炳初ヲ本官ノ許ニ遣ハシ左ノ通り取
次カシメタリ

陳果夫ハ最近極秘裡ニ莫斯科ニ到着現在蘇支聯携ニ暗躍ヲ
續ケ居ル事實アル處自分(何)ノ得タル各方面ヨリノ情報ヲ
綜合スルニ陳ノ使命ハ左ノ如キ重大性ヲ有シ形勢次第ニ依
リテハ中日兩國將來ノ爲面白カラサルコトトナルニ付私人
トシテ御知ラセス即チ

一、蘇聯當局ハ從來極東問題ニ付蘇聯大使館附武官鄧文儀ヲ
介シ中央當局ニ對シ種々申入ヲ爲シ來レルモ鄧ハ飛行機
問題ノ爲一時蒋介石ノ信用ヲ失ヒシ關係上蔣ハ蘇聯側ノ
申入ヲ餘リ相手ニセサリシカ客年秋特ニ華北問題發生後
蘇聯當局ハ對支政策ヲ根本的ニ改變セルコト判明セル爲
今回陳ノ露都入トナレリ

二、第三國際及蘇聯當局ハ是迄蒋介石ノアル限り支那ヲ援助
スルモ甲斐ナシトノ見解ヲ持シ來リ中國共產黨ニ對シテ
モ從來抗日討蔣ヲ第一ノ「スローガン」トセシメ來リシ
カ近年極東ニ於ケル情勢ノ變化ニ鑑ミ昨年秋鄧文儀ヲ通
シ

點ハ多々アリ陳ノ交渉カ果シテ纏マルヘキヤ否ヤハ豫
斷ハ許ササルモ最近蘇支關係ノ接近セルコトハ看過シ
難キ事實ニシテ蒋介石ノ對日外交ニ斯ル半面ノアルコ
ト丈ケナリトモ貴國政府カ心ニ留メ置カルルコトハ東
洋平和ノ爲必要ト信ス

尙本情報ハ確實ナル筋ヨリ得居ルモノニシテ信ヲ置クニ
足ルト言ヒ此ノ情報カ自分(何)ヨリ出テタルモノナルコ
トハ日本側ニテ嚴秘ニ附セラレ度シ云々

支、滿、北平、南京、天津、廣東、青島、濟南、福州ヘ轉
電アリタシ
九江、重慶ヘ暗送セリ

1096 昭和11年3月19日 在ソ連邦大田(為吉)大使より
広田外務大臣宛(電報)

外蒙に對する主權問題は現状を容認せざるを得
ない旨顏惠慶在ソ連邦中国大使説明について

モスクワ 3月19日後発
本省 3月20日前着
第二〇四號

顏大使ハ二十三日當地發歸國スル由ニテ挨拶ノ爲本使ヲ來訪セルカ其ノ際本使ノ問ニ對シ同大使ハ休暇ニテ歸國スル次第ナルモ再ヒ歸任スルヤ否ヤ未定ナリト答ヘ(支發閣下宛電報第一九三號末段參照)又本使カ支那政府ノ外蒙ニ對スル態度如何ト問ヘルニ對シ同大使ハ理論的ニ言ヘハ二四年ノ蘇支協定第五條ニ於テ蘇政府ハ外蒙ヲ支那ノ構成分子ト認メ且外蒙ニ對スル支那ノ主權ヲ尊重シ又外蒙ヨリ撤兵方約シ居ルヲ以テ支那トシテハ右規定ヲ有效ナルモノトシテ考ヘ居ル次第ナルモ事實上ヨリ言ヘハ現實ノ事態ヲ認ムルノ外ナキ事情ニアリテ實ハ過日「スターリン」カ「ハワード」トノ「インタービュー」中ニ外蒙問題ニ言及セル點ニ付支那政府ノ注意ヲ喚起シ置ケルモ今日迄何等ノ訓令ニ接セサル次第ナル旨内話セリ

滿ヘ轉電セリ

1097

昭和11年3月23日

在中国有田大使より
広田外務大臣宛(電報)

陳果夫訪ソの情報につき何鍵湖南省主席が詳細説明について

ヨリ極秘ノ含トシテ聞キタル所ニシテ間違ナク陳ハ入露ニ當リ其ノ行動ヲ秘スヘク病氣ト稱シ引籠リ何人ニモ面會セサルコトトシ現在モ尙同様ノ手ヲ用ヒ居ル爲同人力現在果シテ露國ニアルヤ歸途ニアルヤ將又既ニ歸任シ居ルヤハ何人モ確メ得サル所ナリ

(ロ)從テ陳入露ノ時期ハ自分モ知ラサルモ右ハ昨年未以後ノコトト思ハル

(ハ)此ノ間ノ情報ニ依リ蘇聯當局カ如何ニ積極的ニ支那ニ働キ掛ケツツアルヤヲ知ルニ足ルヘク蔣介石ノ腹心タル陳ノ入露ハ蔣カ種々ノ好餌ニ釣ラレテ多少トモ心ヲ動カシ始メタル證據ナリ自分ハ責任ノ地位ニアル蔣カ蘇聯當局ノ申出ヲ容ルル様ノコトハ萬ナカルヘシト信スルモ最近露支關係カ餘程接近シ來レルコトハ看過シ得スト思考ス

(ニ)昨年九月蘇當局ヨリ最初蔣介石ニ申越セル秘密傳言ハ左ノ通ナリシ由

(脱?)ノ論有力ナリシモ今後ハ蔣政權ヲ支持スヘキニ付共產黨ヲ國民黨同様合法政黨トシテ認メラレ度シ

(ハ)蔣カ右ヲ撥付ケタル結果蘇當局ハ此ノ間内報セル如キ

上海 3月23日後発
本省 3月23日夜着

第二一五號

長沙發本使宛電報

第一號

貴電第一號ニ關シ

一、早速唐ニ確メタルニ同人ハ(大臣宛?)往電第一一號ノ趣旨ヲ更ニ繰返シタル上何鍵カ自分ヲシテ右内報ヲ爲サシメタル動機トシテ大要左ノ通り言明セリ

何ハ平素儒學者トシテ共產黨ヲ非常ニ嫌ヒ居リ其ノ政見モ共產思想ノ撲滅ヲ第一義トシ居ル關係上蘇聯側最近ノ策動ヲ非常ニ重大視セル一方同人ハ熱心ナル孔子ノ大道主義信奉者トシテ將又東洋ニ於ケル精神文明ノ發揚ニ依リ世界ノ平和ヲ齎サントスル強キ信念ノ下ニ大局的見地ヨリ多分ノ好意ヲ以テ内報セルモノニシテ右以外他意無キコトヲ保障ス

二、昨夜何鍵ヲ私宅ニ訪レ種々談話ノ際同人ハ唐ノ内報ヲ全部確認シ本官ノ質問ニ對シ左ノ通り答ヘタリ

(イ)陳果夫入露ノ事實ハ自分カ南京出張ノ砌蔣介石側近者

案(冒頭拙電御參照)ヲ持出セルモノニシテ同案ノ骨子ハ日支關係ヲ離間シ兩國間ノ不和ニ乘シ益々極東ニ赤化ノ魔手ヲ伸ハサントスルニアルカ爲一應御注意申上ケタル次第ナリ

(ハ)來ルヘキ國民大會迄ハ蔣ハ必スヤ萬事現狀維持ヲ以テ進ムヘキヲ以テ露支關係ニ何等ノ發展ヲ見ルモノトセハ同大會後ナルヘシ尙將來對日對露關係ニ就テ蔣カ方一向ヲ誤ル様ノコトハ多分ナルカヘキモ唯心配ナルハ少壯派トシテ軍事委員會始メ中央ノ要職ニアリ最近根強キ勢力ヲ張レル黃埔出身者中ニ親露主義者極メテ多ク而モ其ノ全部ハ對日惡感ヲ懷ケルコトナリ

貴電ノ通り轉電暗送アリタシ

1098

昭和11年3月30日

在アフガニスタン北田公使より
広田外務大臣宛(電報)

新疆での英ソ両国活動に関するアフガニスタン総理大臣の情勢分析について

カブール 3月30日後発
本省 3月31日前着

第二八號(極秘)

(一)總理大臣ノ内話ニ依レハ英印カ未タ和闖又ハ東罕ヲ助ケサルハ日本ノ監視ト南京政府ノ關係係ニ國際聯盟ニテ抗議サルルヲ惧ルル爲ナルカ其ノ後モ通商障礙ハ依然タリ「タイヒマン」ノ對策(英國公使ハ報告書内示ヲ約セリ)ハ政治問題主ナリト云フ

英印ハ我對北支、外蒙活動ノ目的ノ一部カ赤化阻止ト蘇聯關係ニアルハ了解スルモ其ノ進出力ノ餘リニ速ナルニ驚キ且外蒙ノ次ハ新疆ナルヘキ處其ノ場合ノ對印影響如何ニ付大イニ疑ヲ懷キ始メ或ハ英蘇接近ヲ促スヤモ知レズ我方トシテハ成ルヘク先方ノ危惧ヲ去ルコト有益ナルヘシ

他方當國政府ハ蘇聯邦ノ抗議覺悟ニテ積極的ニ和闖ヲ援助シ第三國ヨリノ武器取次ニモ應スル意思アリ當國內亡命ノ新疆、土耳其斯擔關係主腦者ニモ働キ掛ケ居レリ此ノ態度ハ英印ト或聯絡アルヤニ觀ル向モアリ

(二)蘇聯ハ「フアルガナ」地方ノ新疆出身者ヲ共產化シ喀什噶爾ニ増援シ又同地ニ土耳其語新聞「新生活」ヲ創刊シ盛ニ日本ヲ中傷中ナルカ全般ノ形勢ハ往電第一九號ノ如ク

大田大使ニ對スルト略同様ノ趣旨ヲ語りタルニ依リ(但シ蘇蒙相互援助議定書ハ三月十二日調印済ナル由)本官ヨリ右議定書ハ蘇支北京協定ト牴觸セサルヤト尋ネタルニ「ボ」ハ内容猶不明ナレハ今何トモ申上ケ兼ヌト逃ケタレハ何日頃内容發表セラルヘキヤト問ヘルニ「ボ」ハ本月中ニハ間違ナカルヘキカ或ハ極メテ最近トナルヤモ知レスト答ヘ更ニ本官ヨリ最近支那側ヨリ本件ニ關シ何等カ申出アリシヤト問ヘルニ(昨六日「ボ」ハ徐謨ニ面會シ居レリ)内々ナルカ支那側ハ相當神經ヲ尖ラシ居レル如シトノミ答ヘ居タリ支、北平、天津、滿ヘ轉電セリ

(付記)

「ソ」、蒙相互援助議定書 昭、一一、四、二八

去ル四月八日莫斯科及「ウランバートル」ニ於テ同時ニ發表セラレタル「ソ」、蒙間相互援助ニ關スル議定書(有效期間十年)ハ本文僅ニ四ヶ條ノ簡單ナルモノニシテ要スルニ

第三國カ何レカ一方ノ領土ヲ攻撃スル脅威存スル場合ハ直チニ協議ヲ行ヒ双方領土ノ安全ヲ保障スルニ必要

ク回教軍ハ進出ヲ焦リ居ルモ和闖軍ハ武器等不足シ東罕モ日英又ハ南京ノ援助ヲ希望セリ

(三)當國總理大臣ハ莫斯科駐在當時屢外蒙使節ヨリ蘇聯邦ト結フハ他ニ實力者ナキ爲ニテ本意ニハアラストノ告白ヲ聞ケルカ日本カ滿洲國ヲ援ケ行カハ時ト共ニ自ラ外蒙ハ蘇聯邦ヲ離ルヘシト語レル趣
前電ノ通り暗送シ羅馬ニ郵送セリ

1099 昭和十一年四月七日 在南京須磨總領事より 有田外務大臣宛(電報)

ソ連・外蒙間相互援助議定書の成立に關して 中國ソ連大使へ照会について

付記 昭和十一年四月二十八日付、作成局課不明 「ソ」、蒙相互援助議定書

南京 4月7日夜発 本省 4月7日夜着

第二八四號(至急)

貴電合第二三〇號ニ關シ 本七日「ボゴモロフ」ハ本官ニ對シ「ストモニヤコフ」ノ

ナル一切ノ手段ヲ取ルコト(第一條)

第三國カ何レカ一方ヲ武力ヲ以テ攻撃シタル場合ハ他方ハ武力援助ヲ含ム一切ノ援助ヲ攻撃セラレタル方ニ與フルコト(第二條)

ヨ内容トス換言スレハ日、滿側カ外蒙ヲ攻撃スル脅威ノ存スル場合ハ「ソ」聯ハ外蒙ト協議シ外蒙竝「ソ」聯ノ領土保全ノ爲メ必要ナル一切ノ手段ヲ講シ又日、滿側カ外蒙ヲ現實ニ攻撃シタル場合ハ「ソ」聯ハ兵力、財力其他凡ユル手段ヲ以テ外蒙ヲ援助スト言フニ在リ

ニ、本議定書ノ署名ニ至レル經緯ニ付テハ「ソ」政府ハ「ソ」、蒙間ニハ一九二一年(大正十年)以來密接ナル關係アリ、一昨年日、滿側カ外蒙ニ對シ攻勢ヲ取りシ爲メ同年十一月二十七日相互援助ノ紳士協約成リ更ニ昨年「ソ」側ヨリ注意セルニ拘ラス(昨年七月六日「ユレネフ」廣田大臣ヲ來訪、外蒙ニ關シ申出其後モ莫斯科ニ於テ外務部當局ヨリ大田大使ヘハ屢々申出テタリ)日、滿軍ノ外蒙攻撃息マサリシ爲メ本年一月ニ至リ終ニ外蒙側ヨリ一昨年ノ紳士協約ヲ議定書ノ形ニ改ムルト共ニ(一層積極的ニ)援助セムコトヲ求メ來レルニ依リ茲ニ外蒙ノ希望ヲ容レ

議定書ヲ作成スルニ至レルモノナリト述ヘ(四月八日「ソ」政府機關紙「イズヴェスチャ」社説)如何ニモ外蒙ヨリ泣附カレタルカノ印象ヲ與ヘ居ルモ既往ノ「ソ」、蒙關係ノ實際ニ鑑ミ右ハ「ソ」聯自身ノ日、滿側ニ對スル對抗措置ニシテ相當以前ヨリ考ヘ居タル案ナルニ相違ナク只現在迄ニ斯ル措置ヲ取ラムト欲スレハ幾度モ機會ハアリタル筈ナルニ拘ラス寧ロ自重ヲ續ケ本年三月中旬ニ之ヲ敢行シタルコトニ付テハ篤ト考慮ヲ要スヘシ

「ソ」、蒙間ニ軍事的密約アリトノ説ハ實ハ昭和二年頃ヨリ時折耳ニシタ二、三年來ハ特ニ然ルモノアリ旁々有事ノ場合ハ極東赤軍カ外蒙ヲ行動區域内ニ入ルルノ手配成リ居ルモノトハ識者ノ間ニハ考ヘラレ居タルトコロナレハ今回ノ議定書ノ如キモ別段奇異ノ觀ヲ與ヘサリシ次第ナルモ只斯ル文書ヲ作成、發表シタルハ何ト言ヒテモ相當大膽ナル行動ナリ左ニ少シク既往ニ遡リ外蒙ニ關スル日、「ソ」關係ヲ點檢スルニ昭和二年我方カ田中滿洲里領事ヲシテ外蒙ヲ視察セシメムトシ在「ソ」田中大使ヲシテ同地ノ外蒙全權代表(公使)ト交渉セシメタル當時、「ソ」政府ハ外蒙ニ於ケル獨專的地位ヲ維持セムトシ、

兵ニ射擊セラレ(所謂「ハルハ」廟事件)蒙古兵ノ指揮官赤軍將校タリシヤノ報道アリシ際モ「ソ」政府ハ早速「タス」通信ヲシテ事實無根ナリト打消サシメ昨年六月外蒙側カ日、滿側ノ主張ニ從ヒ滿洲里會議ヲ開催スルニ至リテモ「ソ」側ハ内面異常ナ關心ヲ以テ外蒙側ヲ指導シ居タル形跡アルモ少クトモ表面ハ我不關焉ノ態度ヲ採リタルカ昨年六月下旬關東軍測量手大飼某ノ一行「ハイラステンゴール」附近ニ於テ外蒙兵ノ爲メ拉致セラレタル事件起リ日、滿側ヨリ七月四日外蒙側ニ對シ事件解決ニ關スル要望事項ヲ示シ相當強硬ナル決意(場合ニ依リテハ「タムスクスム」以東ニ在ル外蒙兵ヲ一掃スルコトアルヘシ云々)ヲ示サヤ「ソ」側ハ茲ニ從來ノ黑幕の立場ヲ棄テ表面ニ出テ來タリ七月六日「ユレネフ」急遽廣田大臣ヲ來訪外蒙領土ニ對スル脅威ハ「ソ」領土ニ對スル脅威ト認メサルヲ得サルニ付日、滿側ノ外蒙攻撃ヲ制止アリタシトノ趣旨ヲ申出テ其ノ際大臣ヨリ「ソ」政府ハ如何ナル根據ニ基ク滿、蒙間ノ事ニ付日本政府ニ申入ヲナスヤト反問シタルニ「ユ」ハ實際「ソ」聯カ外蒙ト緊密ナル關係ニ在ル爲メナリト答フルニ止マリ所謂法律

又外蒙ヲ足場トスル對支策動ヲ日本側ニ見ラルコトヲ嫌ヒタルモノカ表面ハ外蒙ノコトハ我不關ノ風ヲ裝ヒナカラ裏面ハ頻リニ之ヲ妨害シ終ニ我目的ヲ達セサリシコトアリ(因ニ昭和二年七月在莫斯科蒙古全權代表部員ハ我大使館員ニ對シ頻リニ帝國カ外蒙ヲ正式ニ承認セムコトヲ希望スル旨述ヘタルニ依リ田中滿洲里領事入蒙ノ件モ引掛リ居タル關係モアリ昭和三年田中大使ハ直接外蒙ヲ承認スルヲ可トストノ意見ヲ電稟シタルカ當時本省ニ於テハ支那ハ「ソ」、蒙關係ヲ以テ既成事實トシ默認シ居ルモ外蒙ト特殊ノ關係ヲ有セサル帝國カ同國ヲ承認スルコトニハ反對ヲ表スヘク且又外蒙承認ハ九國條約違反ノ嫌アリトノ意見行ハレ在露大使ヲシテ深入リスルコト避ケシメタリ其後昭和九年八月鮮銀哈爾濱出張員川澄某ノ一行「ボイル」湖西岸ノ滿、蒙境界附近ニ於テ外蒙兵ニ拉致セラレタルニ依リ我方ヨリ在「ソ」大使ヲ通シ「ソ」政府當局ニ釋放方斡旋ヲ依頼シタル際モ直接外蒙代表ヘ交渉アリタシト逃ケ結局外蒙代表部トノ直接話合ニ依リ梟ノ着キタル形トナリ更ニ又昭和十年一月本多少佐ノ一行「ボイル」湖北ノ「ハルハ」廟附近ニ於テ外蒙

的根據ヲ示ササリシ次第ナリ其後昨年十一月末滿洲里會議決裂以來漸ク滿、蒙間ニ事件増加シ十一月十九日、十二月二十四日、本年一月十四日、十五日、十八日、二十二日、二十六日、二十七日、二月九日、十二日ニ大小ノ衝突事件續出シ(別項滿、蒙境界事件御參照)外蒙自身ノ不安ハサルコトナカラ「ソ」政府ノ滿、蒙境界同方面ニ對スル懸念尋常ナラサルモノアリタルモノノ如ク殊ニ彼等ノ常識トシテ若シ外蒙ニシテ日、滿ノ奪取スルトコロトナラムカ日、滿軍ハ「バイカル」湖沿岸地方ヲ襲ヒ西比利亞鐵道ヲ遮斷シ「ソ」領本土ト極東「ソ」領トハ切斷セラレ「バイカル」湖以東ノ折角ノ軍備モ水泡ニ歸スヘシト考ヘ居ルモノノ如ク(此點ハ「ソ」、蒙議定書發表當日ノ「ソ」政府機關紙「イズヴェスチャ」ノ社説中ニモ明瞭ニ述ヘ居レリ)且又外蒙ニシテ日、滿側ノ手ニ歸セムカ「ソ」聯ノ對支策動ノ有力ナル一足場ハ失ハルヘク旁日、滿側ノ外蒙進出ハ正ニ一石二鳥ノ意義ヲ有スト認メラレ得ヘク旁人口九十萬足ラスノ茫漠タル外蒙ニ對シ「ソ」聯カ殊ノ外眞劍ナル態度ヲ取り居ル原因モ實ニ茲ニ在リト言ハサルヲ得ス近時「ソ」當局カ頻リニ紛爭

處理委員會ノ設置ヲ滿、「ソ」國境ノミナラス滿、蒙境
界ニモ一樣ニ及サムコトヲ要望シ居ル理由モ亦茲ニ見出
シ得ヘシ

「ソ」政府カ「ソ」、蒙間相互援助ニ關スル議定書ヲ作成
シ之ヲ發表スルノ大膽ナル行動ニ出テタル事情ハ大体前
述ノ事態ニ依リ了解シ得ラルヘキ處只之ヲ三月十二日ニ
敢行シタルコトニ付テハ二、二六事件後ノ我國ノ情勢ニ
對スル彼等ノ判斷カ相當與テ力アリタルニ非サヤトモ考
ヘラル

三、「ソ」聯ノ議定書署名ハ形式論トシテ一九二四年(大正十
三年)ノ「ソ」、支協定第四條及第五條ニ照ラシ支那ノ主
權ヲ侵害スル行動タルコトハ疑ナク依テ我方ハ支那政府
ニ注意シ兎ニ角支那政府ヨリ「ソ」政府ヘ抗議シ之ヲ認
メスト申入レタル次第ナル處「ソ」側ハ支那ノ主權ヲ侵
害セス、外蒙ノ如キ支那内ノ自治政權トノ間ニ協定ヲ結
ヘル例ハ一九二四年ノ「ソ」、奉協定ニモアリト應酬シ
之ニ對シ支那側ハ「ソ」、奉協定ニ對シテハ當時抗議シ
其後之ヲ追認スルニ至リタル次第ナリトテ前回ノ抗議ヲ
維持シ其ノ儘トナリ居レルカ右抗議ハ結局支那側ノ面子

北平 4月9日午後
本省 4月9日夜着

第一七六號
當地北平晨報、華北日報、全民報ノ三新聞ハ蘇蒙協定ノ成
立ニ關シ九日論説ヲ掲ケタル處其ノ要旨左ノ通

(一)北平晨報
本協定ノ成立ニ關シ滿洲國外交部ハ右ハ滿洲ニ對スル蘇
蒙同盟ニシテ且外蒙ヲ東亞赤化ノ根據地タラシメントス
ルモノナリト聲明セルカ外蒙ハ自衛ノ爲己ムヲ得ス右協
定ヲ締結シタルモノト云フヘク蘇聯側モ國境ノ脅威ヲ受
ケ外蒙トノ提携ヲ餘儀ナクセラレタルモノニシテ何レモ
夫々理由アリ要スルニ今日ノ世界ハ既成事實ヲ以テ條約
ヲ廢棄シテ顧ミサル時代ニシテ支那ノ對外關係ニシテ之
ニ類スルモノ鮮カラス是等ニ對シ一々抗議スルモ到底之
ヲ制止シ難シ元來國家自衛ノ爲ニハ條約ノ廢棄ハ勿論其
ノ他一切ノ行動ヲ採リ得ルモノナルヲ以テ立場ヲ代ヘテ
見レハ外蒙蘇聯ニ對シ深ク咎ムルコト能ハス之ヲ責ムル
モ實益ナキ次第ナリ

(二)華北日報

保持ノ措置ニ過キサルヘキノミナラス支那側ハ例ニ依リ
以夷制夷ノ魂膽ヲ有シ到底彼等ニ期待シ得サルモノト考
フ

四、依テ今後「ソ」、蒙議定書ニ關シ如何ナル態度ヲ採ルヘ
キカヲ考察スルニ從來我方ハ何等外蒙ニ對スル「ソ」聯
ノ特殊の立場ヲ認ムルカ如キコトヲ避ケ外蒙ニ關スル
「ソ」聯ノ發言ヲ一切封スル方針ニ出テ居ル關係上(別項
滿、蒙交渉御參照)「ソ」、蒙議定書ニ對シテモ外蒙ハ支
那ノ一部ナリトノ建前ノ下ニ本件議定書ノ如キ默殺スル
ノ態度ニ出ツルコトトナルヘキ處右態度ハ我方表面ノ態
度トシテ適當ナルヘキモ現實政策ノ問題トシテ「ソ」、
蒙間ニ共同防衛ノ關係ノ存スル事實ハ之ヲ無視セスシテ
滿、蒙關係打開上適當ニ此ノ實際關係ヲ我方ノ表面ノ立
場ヲ害スルコトナク利用シ然ルヘキニ非サヤト考ヘラル

1100
昭和11年4月9日
在中国武蔵大使館一等書記官より
有田外務大臣宛(電報)
ソ蒙相互援助議定書の成立に関する中国紙論
調について

日本カ東北四省ヲ占領シタル結果蘇聯ハ鮮カラス脅威ヲ
受ケ自衛ノ爲本協定ヲ締結シ外蒙ヲ前哨トシテ日滿勢力
ノ發展ヲ防止セントスルニ至レルハ蘇聯トシテハ策ノ得
タルモノナランモ
右ハ國際法竝ニ蘇支條約ニ違反セルモノニシテ斷シテ容
認シ難シ殊ニ蘇支兩國ハ何レモ國際聯盟國ナルヲ以テ領
土ノ完成ニ付テハ相互ニ之ヲ尊重セサルヘカラス蘇聯カ
我方ノ抗議ニ對シ満足ナル回答ヲ與ヘサルニ於テハ我方
ハ更ニ法律上必要ナル方法ヲ採ラサルヘカラス

(三)全民報
本協定ハ東亞ニ一大影響ヲ與ヘ殊ニ大陸政策ニ乘出シ蘇
聯ト一戦ヲ交ヘント欲シツツアル日本ニ對シ最大ナル衝
動ヲ與ヘタルモノナリ之ヲ支那側ヨリ觀レハ本協定ノ締
結ハ素ヨリ國際條約ニ違反スルモノナレトモ如何セン支
那ハ弱國ニシテ「ペーパー、プロテスタ」ヲ爲ス以外武
力ヲ以テ之ヲ防止スルニ由ナク今後東亞ノ局面ハ日本カ
蘇聯ニ對シ如何ナル對策ニ出ツルヤニ依リ發展スヘシ
支、南京、天津、滿ヘ轉電セリ

1101 昭和11年4月9日 在ソ連邦大田大使より
有田外務大臣宛(電報)

ソ蒙相互援助協定書をめぐる中ソ両政府間での公文交換について

モスクワ 4月9日後発
本省 4月10日前着

第二六〇號

九日各紙ハ蘇支政府間公文交換ト題シ左ノ如キ「タス」ヲ掲ケタリ

(一)四月七日張群ヨリ「ボゴモロフ」宛公文

本月二日貴使(ボ)ヨリ蘇蒙協定書ナル文書ノ寫ヲ受ケタルカ周知ノ通り一九二四年ノ蘇支協定第五條ニハ蘇政府ハ外蒙カ支那ノ構成部分タルコトヲ承認シ之ニ對スル支那ノ主權ヲ尊重スト言ヘリ外蒙カ支那ノ構成部分ナル限リ如何ナル外國モ之ト條約又ハ協定ヲ締結シ得サルナリ支那政府ニ對スル義務ニ反シテ外蒙ト前記協定書ヲ締結セル蘇政府ノ行為ハ明カニ支那ノ主權ヲ侵害シ蘇支協定ニ違反スルモノナリ依テ貴使ニ對シ強硬ナル抗議ヲ爲シ蘇政府カ外蒙ト右議定書ヲ締結セルハ不法ニシテ支那

1102 昭和11年4月15日 在中国若杉臨時代理大使より
有田外務大臣宛(電報)

ソ蒙相互援助協定書成立ならびに中ソ不可侵條約締結交渉に関する在中國ソ連大使の説明

ノニシテ蘇政府ハ茲ニ右協定カ蘇聯邦ニ關スル限リ將來モ有效ナルコトヲ再ヒ確認ス支那ノ自治的區域ト協定ヲ締結スル形式的權利ニ關シテハ奉露協定ノ締結ヲ想起スレハ足ルヘク右締結ハ支那政府ノ抗議ヲ招來セサリシモノナルノミナラス同政府ハ北京協定ト共ニ奉露協定カ完全ニ有效ナルコトヲ認メタリ尙蘇蒙協定カ蘇聯邦又ハ蒙古カ侵略ノ犠牲トナリ其ノ領土ヲ護ル要アルトキニノミ發動スルモノナルニ依リ他國ノ利害ニ對シ向ケラレ居ラサルコトモ注意スヘキナリ
以上ニ依リ蘇政府ハ支那政府ノ抗議ヲ根據無キモノトシテ却クル要アリト認ムルト共ニ支那政府ニ於テ蘇蒙協定書カ北京協定ニ抵觸セス且蒙支兩國國民ノ利益ニ合致スルコトヲ認ムルニ至ランコトヲ確信ス
滿ヘ轉電シ在歐各大使、壽府、波蘭ニ郵送セリ

政府ハ如何ナル場合ニモ斯ル議定書ヲ認ムルコトヲ得ス且之ニ依リ何等拘束セラルルモノニアラサルコトヲ聲明セサルヲ得ス右貴政府ニ傳達セラレ満足ナル回答ヲ與ヘラレンコトヲ要望ス

(二)八日「リトヴィノフ」ヨリ代理大使吳南如宛公文

七日政府ノ訓令ニ依リ貴官(吳)ハ同日「ボゴモロフ」ニ手交セラレタル公文ノ寫ヲ提出セラレタルカ右公文ハ三月十二日蘇政府カ蒙古政府ト議定書ニ署名セルハ支那ノ主權ヲ侵害シ蘇支協定ニ違反スルモノナルヤニテ從テ南京政府カ抗議シ得ルモノト認メタルヲ其ノ根據トス

右ニ對スル回答トシテ本官ハ左ノ通り聲明ス即チ蘇政府ハ右公文ニアルカ如キ蘇蒙協定書ノ解釋ニ同意シ得ス從テ支那政府ノ抗議ヲ根據アルモノト認メ得サルナリ議定書署名ノ事實モ其ノ各條項モ支那ノ主權ヲ毫モ侵害セス且何等支那又ハ蒙古ニ對スル關係ニ於テ蘇聯邦ノ領土の企圖ヲ許容シ又ハ包含スルモノニアラス議定書ノ署名ハ現ニ蘇支、蘇蒙間ニ存スル形式的及實際的關係ニ何等變更ヲ齎ササルナリ蘇聯邦ハ右署名ニ當リ蘇支協定カ何等毀損セラレス其ノ效力ヲ持續ストノ見地ヨリ出テタルモ

について

上海 4月15日夜発
本省 4月15日夜着

第二五六號

十五日日本官「ボゴモロフ」大使ト會談ノ要旨左ノ通り御參考迄

一、大使ハ最近蘇滿國境ニ於テ屢日蘇軍隊ノ衝突ヲ見ルハ頗ル不幸ナルカ之カ調整ニハ國境調査委員ヲ設クルモノ一方法ナルヘシト述ヘタルニ對シ本官ヨリ最近著シク蘇聯側カ攻勢ヲ示スニ至リ又極東ニ兵力ヲ集結シツツアル一方外蒙トノ軍事協定ヲ發表スルカ如キハ日本ニ對シ挑戰スルモノニ外ナラスト觀測スル者モアル處貴見如何ト質シタル所大使ハ前記兩國軍隊間ノ衝突ハ出先若イ者同士ノ小競合ニテ殊ニ蘇側ニ於テ攻勢ヲ取レル次第ニアラス日本軍側ノ行動ニ對シ已ムヲ得ス防衛手段ヲ取レルニ過キスシテ蘇側ニ於テハ却テ滿洲ニ於ケル日本軍ノ兵力ニ脅威ヲ感シ居ル位ニテ滿洲ヲ侵略セントスルガ如キ意圖無キハ蘇側ヨリ屢日本ニ對シ不可侵條約締結ノ申入ヲ爲シ今尙右締結ノ希望ヲ有スル事實ニ徴スルモ明カナルカ日

本カ何カ故ニ右不可侵條約締結ニ應セサルヤ了解ニ苦シム所ニシテ不可侵條約サヘ締結サルレハ前記ノ如キ國境ノ出來事モ起ラサルヘク又外蒙トノ協定ノ如キモ不必要トナルヘシト語レリ

ニ本官ヨリ蘇支間不可侵條約ノ交渉ハ如何ナリシヤト問ヒタルニ大使ハ蘇側ハ支那ニ對シテモ不可侵條約ヲ提議セルモ支那側ハ一向氣乗セスト答ヘタルニ付本官ハ世間ニハ蘇支間ニ何等カノ密約行ハレ居ルモノト信シ居ル向アル處眞相如何ト尋ネタルニ大使ハ蘇聯ハ元來平和ト秘密條約排斥ヲ國是トスルモノナルカ故ニ支那ニ對シテモ秘密條約ヲ締結シ居ラサルコトハ現ニ不可侵條約及通商條約サヘ締結不可能ノ狀態ニ見ルモ明カナルヘシト述ヘタルニ付本官ヨリ然ラハ最近發表セラレタル蘇蒙相互援助協定ノ如キ重大ナル同盟條約ノ如キ密約カ最近ノ發表迄存在シタル事實ハ如何ト指摘シタル處大使ハ右ハ秘密條約ニアラスシテ實ハ外蒙人民共和國成立以來蘇蒙間ニハ相互ニ親密ナル友誼存シタルカ昨年外蒙總理大臣一行莫斯科訪問ノ際蘇蒙間ニ相互援助ノ口約成立シタル處其ノ後外蒙側ノ希望ニ依リ三月十二日之ヲ書物ニ認メタルニ

ハ不信行爲ノ如ク僻ミ居ル模様ナルモ同協定ハ蘇聯本來ノ主張タル不可侵條約ト同趣旨ニ依リ全然防禦的ノモノニシテ何等侵略的ノ意味ヲ有セサルヲ以テ日滿側ニ於テ外蒙侵略ノ意圖ナキ限り問題トナラサル筈ニシテ日本側カ蘇側ノ主張スル不可侵條約ノ締結ニ應シサハスレハ自然解決スヘキ問題ナリト答ヘタリ
南京、北平、天津へ轉電セリ

1103 昭和11年4月20日 在南京須磨總領事より 有田外務大臣宛(電報)

日ソ關係先鋭化によって中国の立場が困難と なっているとの中国紙論説について

南京 4月20日後発
本省 4月20日夜着

第三三四號

二十日ノ中國日報ハ共同防赤ト蘇蒙協定ナル論説ヲ掲ケ日蘇關係先鋭化セル今日支那一般民衆中ニハ尙之ヲ對岸ノ火災視セル向鮮カラサル處右ハ大ナル誤ナリ蓋シ日本ノ大陸政策ト蘇聯ノ東漸政策トハ到底相容ルル能ハス而モ中原ノ

過キスト辯明ニ努メタルヲ以テ本官ヨリ右ノ如ク相當長キ期間ニ行ハレタル口約及協定成立ノ經緯ハ勿論支那側ニ於テモ承知シ居タルコトト察セラルル處右協定ハ事前ニ於テ支那側トモ了解アリタル次第ナリヤト尋ネタルニ大使ハ外蒙ト支那政府トノ間ニ如何ナル了解アリタルヤ否ヤハ知ラサルモ蘇側ヨリ支那側ニ知ラセタルハ自分(大使)カ最近張群ト會見ノ際右成文ヲ通告セルカ初ニシテ支那側ハ之ニ依リ初メテ知りタルカ如シト語レリ依テ本官ヨリ蘇側ハ南京政府ト豫メ了解ナクシテ直接外蒙當局ト此ノ種重要ナル協定ヲ締結セルハ外蒙ヲ以テ獨立國ト認メテ之ヲ相手方トセル次第ナリヤ又世間ニハ既ニ蘇聯ハ外蒙人民共和國ヲ認メ之ヲ「ソビエツト」聯邦ノ一員ト爲シタルモノノ如ク噂スルモノアルカ如何ト質問シタル處大使ハ蘇側ハ外蒙ヲ以テ支那ノ一部ト看做シ之ヲ獨立國ト認メス右協定ハ單ニ支那ノ地方政權當局ノ希望ニ依リ之ト取極メタルモノニシテ該地方ニ對スル攻撃ニ對シ共同ニ之ヲ防衛セントスルモノニシテ寧ロ支那ノ利益トナルヲ以テ支那政府ノ抗議ハ當ラズト述ヘ又日本ノ新聞紙等カ同協定ヲ目シテ如何ニモ日滿ニ對スル敵對又

鹿トシテ犠牲ニ供セラルルハ支那其ノモノナレハナリ而シテ目下双方政策先鋭化ノ具体化セルモノハ共同防赤ト蘇蒙協定ナリ日本ノ共同防赤トハ華北ニ第二ノ滿洲國ヲ出現セシメントスルモノナレハ蘇蒙協定ヨリモ猶重大ナリ斷然之ヲ拒絕セサルヘカラス但シ兩者ノ政策ハ各因果關係ヲ有スルモノナレハ一方ヲ取消サントセハ同時ニ他ノ一方モ取消ササルヘカラス故ニ蘇蒙協定ト共同防赤トハ不可分ノモノトシテ相共ニ之ヲ否定スルノ策ニ出テサルヘカラスト論シ居レリ御參考迄
支、北平、天津、滿へ轉電セリ

1104 昭和11年5月16日 有田外務大臣より 在張家口中根領事代理宛(電報)

池田書記生の計画を基礎とした新疆地方実地 調査に關し具体案報告方訓令

本省 5月16日後6時10分発

第四三號(極秘)

一、新疆地方實地調査方ニ付テハ曩ニ橋本領事代理ヨリ意見稟申アリ(客年四月十二日附機密第一〇一號公信)其ノ後

種々考究ノ結果池田書記生ノ計畫ヲ基礎トシ本年度豫算ニ新疆地方臨時調査費トシテ一萬四千圓ヲ計上セリ、近ク右予算成立ノ上ハ直チニ實行ニ着手スル要アル處大池田書記生ヲシテ之ニ當ラシメ度所存ナリ然ルニ客年稟申當時トハ途中經由地ノ狀況其ノ他種々現地ノ事情モ異リ居ルヘキニ就テハ旅行方法並出發時期等ニ付再應具體案作成ノ上打返シ報告相成度

ニ尙本件ニ付豫メ南京政府乃至省政府ノ了解ヲ得ラルルニ於テハ此ノ上ナキモ右ハ目下ノ處甚タ困難ナルヘク左リトテ事態ノ改善ヲ待ツ譯ニモ行カサルニ付此ノ際我方限ニテ本件ヲ斷行スルコトト致度シ尙新疆省内各地旅行絶對不可能ナルニ於テハ第一段トシテ省境方面ヨリ哈密附近迄ノ調査ニ主力ヲ注キ現地ノ狀況次第ニヨリ更ニ迪化方面へ進ムコトトスルモ止ムナシト思考シ居レリ右爲念支、北平、南京、天津ニ轉電セリ

1105 昭和11年6月3日 在アフガニスタン北田公使より 有田外務大臣宛(電報)

關係各公館ニ暗送セリ

1106 昭和11年8月12日 在滿州国守屋(和郎)大使館參事官より 有田外務大臣宛

中ノ關係などに鑑みて華北問題の処理を急ぐべきとの大橋満州国外交部次長の意見書について

公機密第一三六六號 (8月17日接受)

昭和十一年八月十二日

在滿

大使館參事官 守屋 和郎(印)

外務大臣 有田 八郎殿

大橋次長ノ對北支問題意見送付ノ件

本月十一日大橋外交部次長ハ大鷹書記官ニ別紙「北支問題ノ處理方法」ヲ交付シタル上「先般極東蘇領視察後自分ノ抱懷スル北支處理意見ハ貴官ノ贊成ヲ得サリシモ(本月一日附桑島局長宛大鷹書記官私信御参照)本件ハ東京外務省ニ於テモ充分審議ヲ得度キ問題ナルヲ以テ今般自分ノ意見ヲ書類ニ纏メタル次第ナルニ付右本省へ轉達相成度場合ニ依リテハ自身近々上京スル考ナリ」ト語リタル趣ナリ

新疆を南北に分け英ソ兩國が勢力範圍を確定したとの情報について

カブール 6月3日後発 本省 6月4日着

第五四號

當國總理大臣カ最近得タル情報ニ依レハ南新疆現^(疆)地ニテハ一般ニ「ヤールカンド」河ヲ境ニ愈英、蘇ノ勢力範圍確立ヲ見タリトセラレ現ニ行政、軍事、出入國、徵稅ノ事務等モ截然區別サレ蘇支側官憲モ英印圈内ノコトハ之ニ讓ル有様ニテ「パミール」ハ蘇側ニ入り當國ハ多大ノ不利ヲ感スルニ至レリ又喀什噶爾政府モ内閣式ノ組織トナリ軍務、政務ノ各大臣ニハ皆蘇聯ニテ教育ヲ受ケタル土着民任命サレ本格的ニ蘇中央政府間ニ協定成立シタル結果ナリヤ否ヤハ確メ得サルモ先般來當國側ノ問ニ對シ英外相及當地英國公使ハ「タイヒマン」報告ヲ基礎ニ今後ノ方針ヲ決スル旨答へ居タル趣ナリ曩ニ外務大臣ト共ニ莫斯科ニ行キタル當國政務局長ノ話ニ依レハ「イーデン」ノ莫斯科行當時少クトモ印度ニ關シテハ既ニ兩國間ニ妥協成リタルハ事實ト認メラルト言フ

本件北支問題ニ關スル大橋次長意見ハ本月上旬本官ヨリ電報セル所ト關連アルコトト被存ニ付右御對照相成様致度此段申進ス

(別紙)

大橋 忠一

北支問題ノ處理方法

一一、八、一一

極東ソ領ノ狀勢ニ關聯シ此ノ際至急解決ヲ要スルハ北支問題ナリ抑々歐州ノ形勢ハ共產及フアツシヨ兩陣營ニ分レテ一見益々混亂ニ陥ル傾向アルモ獨逸ノ軍事未タ完成セス伊太利ハエチオピヤニ於ケル建國工作ニ急ニシテ共ニ急激ナル積極策ニ出ツルノ餘裕ナク更ニ歐州一般ニ大戰ノ慘禍ヲ厭忌スル念慮強ク旁只緊張ヲ續クル程度ニテ動亂勃發ハ急速ニ期待スヘカラス

英國ハ今後恐ラク佛、白兩國ノ安全保障ヲ爲ス程度ニテ漸次歐州大陸ヨリ手ヲ引キ強大ナル軍備ヲ整ヘ米國及其ノ屬領ト共ニ其ノ全世界ニ巨ル權益ノ擁護ニ專念セントシ其ノ結果ハ新嘉坡及香港ノ軍備ハ急速ニ増強セラルヘシ米國モ主トシテ西半球ノ平和維持及海外權益擁護ノ立場ヨリ武力

強化ニ努メ極東問題ニ付テ英國ト協調スヘシソ聯ハ今ヤ内
人心ヲ收攬シ外佛國ト相互援助協定ヲ結ヒテ國際的地位ノ
向上ニ努ムルト共ニ歐州ニ於テ獨逸ニ備フル爲極東特別軍
ノミヲ以テ日本ニ對抗シ得ル標準ヲ以テ着々極東軍備ヲ急
キツアルモ目下ノ處防備未タ不充分ナルノミナラス國內
ノ不安及歐州ノ動搖殊ニ獨逸ノ脅威ノ爲目下ノ處徹底的ニ
守勢ヲ維持シ日滿軍ノ侵入ヲ極度ニ警戒シ居ルニ似タリ然
レトモソ聯ハ今ヤ漸次國內人心ノ收攬ニ成功シ極東ニ於テ
ハ西比利亞鐵道ノ複線ヲ略々完成シ是ニ依リ急速力ヲ以テ
軍用機材ヲ極東ニ輸送シツツアルニ鑑ミ英米ノ海上勢力ト
對抗スルヲ要スル日本トシテハ現在ノ經濟機構ヲ以テシテ
ハ國境ニ於テソ聯ヲ壓迫スル程度ノ軍備ヲ増強スルコト容
易ナラサルヘク而モソ聯ハ北滿ニ入りタル日本ハ必ス沿海
州ニ來ルヘシト思ヒ込ミ居ル關係上日本トノ外交々々涉ノ進
展如何ニ拘ラス全力ヲ擧ケテ防備ニ専念スヘク一方日滿ト
シテモ沿海州ニソ聯ノ強大ナル空軍及海軍ノ根據地アルコ
トハ平戰兩時ニ於ケル不斷ノ脅威ニシテ是カ除去ニ努メサ
ルヲ得サル次第ニシテ旁第二次五箇年計畫以來亞細亞ロシ
ヤニ重點ヲ置キ來レルソ聯ノ東漸政策ト滿洲國ヲ據點トス

カス所以ニシテ絶對ニ不可ナルヲ以テ此ノ際積極策ニ依リ
急速ニ南京政府ヲ弱化シ内外蒙ヲ通スル對ソ政策ノ足場ヲ
固メ且英米ニ對スル外交的驅引ノ據點ヲ作ル爲萬難ヲ排シ
テ北支ニ於ケル既定方針ヲ速ニ實現スル必要アリ

北支問題ハ今後一年モ經過スルニ於テハソ支殊ニソ聯ノ北
滿國境ニ於ケル準備増強セラレ且英國ノ香港防備増強セラ
レ而モ日本ノ軍備不充分ナル場合ニハ支那殊ニ北平ニ於ケ
ル我方ノ軍事行動不可能ニ陥リ冀察ハ勿論冀東内蒙政權迄
危機ニ瀕シ支那ニ於テハ手モ足モ出サルニ至リ延イテハ滿
洲國ノ存立ニ迄危険ヲ及ホス懼アリ仍テ北支問題ノ處置ハ
今ヤ日滿自衛上ノ緊急處置トシテ此ノ際一日モ早ク斷行ス
ルヲ要ス換言スレハ日本ハ速ニ差シ當リ爲スヘキコトヲ爲
シタル上守勢ニ轉シ外部ニ對シテハ平和的態度ヲ維持シテ
内部經營ニ専念シソ聯ノ極東政策打倒ノ機ヲ窺フノ外ナシ
此ノ間ニ於テ最モ注意スヘキハ對英米特ニ對英關係ナル處
右ハ北支積極工作ニ際シテ北支工作ノ理由ヲ闡明シ且我方
ノ進ムヘキ限度即チ楊子江以南ニハ進マサルコト及北支ニ
於ケル英國權益ヲ尊重スルノ方針ヲ以テ英國ト接衝シ北支
積極工作ヲ以テ對英協調ノ契機トスルニ努ムル要アリ

ル日本ノ大陸發展政策トヲ調和スルコトハ難事ナリ
支那ハ英米ソ諸國ノ支援ニ依リ着々統一ヲ完成シ而シテ西
南方面ノ統一工作完成ノ上ハ必スヤ冀察冀東内蒙古方面ニ
益々魔手ヲ延ハシ來ルヘキモ時到ル迄ハ不即不離ノ態度ヲ
以テ日本側ノ激發ヲ防止スヘシ

要之東亞ノ現勢ハソ支ハ相結ヒソハ外蒙新疆ニ於ケル優越
性ヲ承認セラルル代償トシテ共產軍ノ奧地引揚ケ其ノ他ノ
方法ニ依リ南京政權ヲ援助強化セントシ英國ハソ支ヲ援助
シ日本牽制ニ努メ居ルカ如ク只ソ支雙方共未タ日本ニ對シ
攻勢ニ出ツル準備ナキ爲暫時ソ聯ハ消極的平和政策ヲ裝ヒ
支那ハ擬裝の親日政策ヲ標榜シツツ事態遷延策ヲ取リツツ
武力ノ充實ニ汲々タリ
即チソ支ノ魂膽ハ支那ハソト組ミ英米ノ後援ニ依リ失地ヲ
恢復セントシソハ支ト組ミ英ノ後援ニ依リ時到ラハ北滿ヲ
恢復シ以テ日本ニ取リテハ大陸發展ノ據點ソ支ニ取リテハ
自己防衛上ノ癌タル滿洲國解消ヲ企圖スルヤニ猜セラル
而シテ是カ對策ハ南方ニ於テ對蘇政策ヲ目標トシテ先ツ支
那方面ヲ處置スル必要アル處其ノ方法トシテ今日消極策ニ
出ツルコトハ冀察冀東内蒙ヲ喪ヒ延ヒテ滿洲國ノ存立ヲ脅

1107

昭和11年8月14日

在中国川越大使より
有田外務大臣宛

新疆方面軍事力者に対するソ連の懐柔策に
ついて

機密大第四五一號

(8月20日接受)

昭和十一年八月十四日

在中華民國

特命全權大使 川越 茂(印)

外務大臣 有田 八郎殿

「ソ」聯邦ノ馬仲英懷柔策ニ關スル件

本件ニ關シ八月九日市政府情報處露西亞科長ハ館員ニ對シ
「ソ」聯邦ハ最近馬仲英ニ手ヲ伸ハシ盛ニ懷柔策ヲ廻ラ
シ居ル模様ニテ馬仲英ハ其ノ部下ノ將領數名ト目下莫斯科
ニ在リ「ソ」側ノ歡待ヲ受ケ居ル由ナルカ右ハ日「ソ」戰
争發生ノ際新疆回教徒ノ日本側ニ利用セラルルヲ阻止シ之
ヲ自國ニ引付ケ置カントスル「ソ」側ノ魂膽ニ因ルモノト
考ヘラルト語レル趣ナリ

右報告ス
本信寫送付先 北平 天津 南京 張家口 在滿

昭和11年9月24日 在張家口中根領事代理より
有田外務大臣宛(電報)

池田書記生の新疆方面実地調査につき具体案報告

張家口 9月24日後発
本省 9月25日後着

第一九四號(至急、極秘)
新疆調査ニ關スル池田ノ計畫左ノ通

一、支那人從者四名ニ六千弗ヲ綏遠ニ携行セシメ該地ニ於テ
新疆向ケ貨物ヲ約三千弗購入三十頭ノ駱駝隊ヲ組織シテ
一路「エジナ」ニ向ハシムヘク本二十四日出發セシメタ
リ

二、池田ハ約一週間後日本ニテ購入セル貨物ヲ百靈廟ニ携行
シ同地ニ於テ右貨物ヲ駱駝隊ニ積込ミ飛行機ニテ阿拉善、
定遠營ニ赴ク

三、定遠營、「エジナ」間ノ飛行機連絡「ガソリン」ノ缺乏
ノ爲其ノ集積ニ約一箇月ヲ要スル由ナレハ該期間同地ニ
滞在ス

四、「エジナ」ニテ駱駝隊ト落合ヒ狀況ニ依リ駱駝隊ト共ニ
哈密ニ直行スルカ或ハ從者一名同伴ノ上肅州ニ向フ

左ノ通

一、張學良ノ共產軍討伐ハ失敗ニ歸シ五箇師ハ大ナル損害ヲ
受ケシ爲目下陝西、河南兩省ニ於テ募兵シ兵力ノ充實ヲ
計リツツアリ是等五箇師長ハ共產軍ト握手停戦シ相互ニ
攻撃セサルコトヲ協定セルカ右ハ張學良ノ指示ニ依ルモ
ノナリト稱セラル

二、陝西、甘肅、寧夏、青海、新疆^{新疆}五省ノ實力者ハ聯合シテ
盛世才ヲ仲介トシ蘇聯ト合作シ必要ノ場合ハ右五省聯合
ノ政治組織ヲ構成セントシ現ニ寧夏省内ニアル于學忠部
ノ一部ハ盛世才ヨリ軍需品ノ補給ヲ受ケツツアリ

三、蔣介石ハ以上ノ情勢ニ鑑ミ山西省内ニアリタル中央軍第
一師胡宗南部ヲ甘肅省ニ移シ右情勢推移ヲ監視セシメン
トシツツアリ

四、蘇聯第三國際ハ内蒙ニ於ケル日本勢力トノ直接衝突ヲ避
ケンカ爲西北各省ヨリスル東進政策ヲ拋棄シテ南進政策
ヲ執リ先ツ河南ニ進行セントスル計畫ヲ樹テタルカ蔣介
石ハ中央軍關麟徵、黃杰ノ二師ヲ河南ニ集中シテ之ヲ防
止セントシツツアリ云々

尙同顧問ノ別ノ方面ヨリ得タル情報ニ依レハ過般ノ廣西問

其何レニセヨ駱駝隊ハ入新セシメ來年度旅行實施ノ礎石タ
ラシム

六、肅州ニ出ツル場合ハ其ノ期日等「エジナ」ヨリ電報シテ
南京及張家口ヨリ甘肅支那側當局ニ充分ナル保護ヲ要求
スル様致度シ

七、尙第一項ノ商品買入ノ爲携行スヘキ金額ニ不足ヲ生シタ
ルニ付至急三千弗御電送ヲ請フ

1109 昭和11年9月25日

在中國花輪(義敬)大使館一等書記官より
有田外務大臣宛(電報)

中国西北地方におけるソ連の影響力ならびに
張學良と共產軍との提携關係に関する情報に
ついて

北平 9月25日後発
本省 9月25日後着

第四九八號

西北方面ノ情勢ニ關シ最近陝西ヨリ北平某有力者宛電報シ
來レル要旨トシテ西田顧問(出所部外秘)ヨリ入手セル情報

題解決ニ當リ蔣介石カ讓歩ヲ敢テセル理由ノ一ハ張學良ノ
中央ニ對スル曖昧ナル態度カ漸次表面化シ共產軍トノ聯絡
露骨トナル兆候アリ西南ニ兵ヲ用ユルトキハ西北方面ノ危
機ヲ招ク惧アリトノコトニテ右ハ上記陝西來電トモ照應シ
學良ノ共產化ノ事實ヲ裏書スルモノナルヤニ認メラル御參
考迄

支、滿、在支各總領事、張家口へ轉電セリ

1110 昭和11年10月31日

在張家口中根領事代理より
有田外務大臣宛(電報)

張學良軍の家族多数が新疆省に向け移動中と
の情報について

張家口 10月31日後発
本省 10月31日後着

第二五二號

本年ニ入り新綏自動車ニ依リ新疆^{新疆}ニ赴ケル舊東北軍人ノ家
族ハ夥シキ數ニ上リ自動車便ノ都合ニテ綏遠ニ待機中ノ者
モ百五十名ヲ算スル處今般新疆^{新疆}省政府駐北平代表張元天ヨ
リ綏遠省政府宛最近張學良ト盛世才トノ了解成立シタルニ

依り右家族等ノ一部ヲ十一月一日緩遠ヨリ北平經由西安ニ向ハシメ同地ヨリ甘肅省ヲ經テ入新セシムルコトナレル旨電報越セル趣ナリ張學良ノ動向ニ關スル御參考迄支、北平、南京、漢口へ轉電セリ
北平ヨリ天津、鄭州へ轉電アリタシ

1111 昭和11年11月2日 在ムンバイ石川(美)領事より
有田外務大臣宛(電報)

英ソ兩國がアジアにおける相互不可侵協定を締結したとの情報について

ムンバイ 11月2日後発
本省 11月2日夜着

第八五號(極秘)

阿富汗發貴大臣宛電報

第九四號

當國臨時外務大臣ノ内話ニ依レハ在壽府國際聯盟代表部(總會中外務大臣モ或委員長トナレリ)ハ最近某友國(信義上國名ヲ示シ得サル由)ヨリ英蘇亞細亞協定ニ關スル極秘通報ヲ受ケタルカ右ニ依レハ兩國ハ歐洲政局不安ニ顧ミ此

1112 昭和11年11月10日 在中国川越大使より
有田外務大臣宛(電報)

日中南京交渉には介入しないがソ連を対象とする軍事協定には反対の旨在中國ソ連大使内話について

上海 11月10日後発
本省 11月10日夜着

第八九七號(極秘)

「ボゴモロフ」大使ハ十日當地出帆ノ「セーベル」號ニテ歸國ノ途ニ就キタルカ「サラートフツエフ」書記官ハ館員ニ對シ大使ノ歸國ハ本月下旬莫斯科ニ招集セラルヘキ新憲法確認ノ爲ノ臨時「ソヴイエト」大會ニ出席ノ爲ニシテ何等他ニ使命アルニアラス大會終了後直ニ歸任ノ筈ナル旨語リタル由ニテ又「ボ」大使ハ出發ニ先立チ同盟松本ニ對シ發表セサル約束ノ下ニ

(一)蘇支通商條約締結ノ交渉ハ目下進行中ナルコト
(二)日支交渉ニ關シ同大使ハ南京側ト話合ヲ爲セル等ノコト
ナシ蘇側トシテハ同交渉力支那自體ノ問題ニ關スル限り成功ヲ祈ル次第ナルカ蘇聯邦ヲ敵トスル軍事同盟ノ如キ

ノ際各自亞細亞ニ於ケル地位ノ安固ヲ計ル必要ヲ認メ相互不侵略協定ヲ結ヒテ互ニ他ノ領土及勢力範圍ヲ決シテ侵ササルコトトシ英國ハ印度及南新疆安全ノ約束ヲ得テ力ヲ日本ニ注キ新嘉坡要塞ヲ固メ且支那問題ヲ有利ニ導カントシ蘇聯邦ニ對シテハ財的其ノ他間接ノ援助ヲモ與ヘテ滿蒙、北支、邊境ヨリ日本ヲ牽制セシムル底意ナルヘク本祕密協定ハ壽府ニ於テ兩國代表間ニ話合ハレ既ニ調印ヲ終リタルカ或ハ終ラントストノコトニテ之ニ關シ日本政府ノ有スル情報ヲ伺ヒ度キ旨申出アリ
尙當國政府トシテハ本件ノ出所並ニ事柄ノ有リ得ヘキコトニ顧ミ之ニ重大關心ヲ有スルハ勿論ニテ其ノ影響ハ全亞細亞ニ及フヘキモノニ付先ツ事實ヲ充分確メタル上互ニ對策(例ヘハ獨逸等ノ「フアシスト」國ヲシテ之ヲ公表抗議セシムルカ如キ)ヲ講スル必要アリト考ヘ居ル趣ナリ
就テハ何等右類似ノ情報等モアラハ御差支ナキ限り御回示相成度シ
本電在英大使へ轉電シ同大使ヨリ歐米大公使(莫斯科ヲ除ク)壽府宛郵送セシム

ハ贊成シ難キコト
等ノ内話セル趣ナリ
北平、南京、天津へ轉電シ上海へ轉報セリ

1113 昭和11年11月20日 在ムンバイ石川領事より
有田外務大臣宛(電報)

英ソ兩國によるアジアでの相互不可侵協定締結の続報について

ムンバイ 11月20日後発
本省 11月20日夜着

第九四號(極秘扱)

阿富汗發貴大臣宛電報

第一〇一號

往電第九五號ニ關シ(英蘇亞細亞協定ニ關スル件)
本件ハ當地ニ關スル限り伊國公使ハ本國政府ノ訓令ニ基キ臨時外務大臣及國王(離任ノ爲拜謁)ニ内話セルモノナルカ其ノ内容ハ往電第九四號ノ通り全亞細亞ニ關スルト告ケタルモノノ如キ處後同公使ハ本官、土耳其大使、獨逸公使ノ三人ニモ内話シタルカ其ノ際ハ印度全國境ニ關スルト言ヘ

リ其ノ後土耳其古大使ハ當地蘇聯邦大使ニ獨逸公使ハ英國公使ニ各々本件ニ付尋ネタルカ何レモ印度ニ關スル限リ斯ル事實ナシト答ヘタル趣ニシテ他方在中ノ阿富汗外務大臣並ニ土耳其古外務大臣ヨリモ此ノ事實ヲ聞知セサル旨各關係方面へ返電アリタリ土耳其古大使ノ内話ニ依レハ印度ニ關シテハ現在此ノ種協定ハ成立セサルヘシ伊國側カスル報道ヲ爲スハ故意ノ宣傳カ又ハ其ノ聞込カ正確ヲ缺キ類似ノ事件(例へハ支那關係ニ付テハ起リ得)ヲ印度ニ關スト即斷セルカノ恐ラク何レカナラント言ヘリ

前電通り轉電セリ

1114 昭和12年1月11日 在ムンバイ石川領事より 有田外務大臣宛(電報)

英ソ両国がインド国境や新疆地方において勢力範囲を確定したとの説を否定する諸情報に
ついて

ムンバイ 1月11日後発
本省 1月11日夜着

第四號(極秘扱)

1115 昭和12年3月27日 在中国川越大使より 佐藤外務大臣宛(電報)

中ソ間に政治的瞭解が成立したとの説は信じがたいが通商条約あるいは文化提携の商議進行中との情報がある旨報告

上海 3月27日後発
本省 3月27日夜着

第一三六號

貴電第二九號ニ關シ(蘇支諒解成立説ニ關スル件)

右ハ當館員ニ於テ南京外交部筋ヨリ出タル情報ナリトシテ聞込タルヲ信シ難キ情報トシテ話シタルモノヲ同盟及讀賣カ直ニ打電シタルモノニテ引續キ眞疑確^確メ中ナルカ支那側ノ情報ヲ綜合スルニ右ハ遽ニ信シ難ク二十五日南京發中央社電モ全然根據ナシト否定シ居レリ尤モ蘇聯邦ノ對支態度著ク妥協協同的トナレルコト最近「ス」代理大使上海常駐ノ「サ」情報部長等殆ト全大使館員南京ニアリテ活躍シ居ルコト等ヨリ見テ前記ノ如キ了解成立ハ別トシ通商條約締結或ハ文化提携ニ關スル商議ノ如キカ進メラレ居ルニアラスヤトノ情報アリ

阿富汗發貴大臣宛電報
第四號

貴電合第六號ニ關シ(英蘇ノ勢力範圍確認説ノ件)

當地各方面共印度國境又ハ新疆等ヲ目的トスル英蘇協定ハ現狀ニテハ英國側ノ利害ヨリ見テ成立セサルモノト爲スニ一致シ居レルカ本件ハ往電第一〇一號ノ件ト關聯アルカ如キ處伊國公使ノ内話ニ依レハ先般ノ出所モ在莫斯科大使ナルカ羅馬ニ於テハ英蘇提携ハ保守黨有力者内ニ反對アリ蘇聯邦側ヨリ頻リニ働キ掛ケ居ルモ急速ノ進展ハナキモノト觀測シ居ル趣ナリ當國政府モ其ノ後ノ情報ヲ綜合シ本件ハ伊國側ノ宣傳又ハ誤報トノ結論ヲ下セリ英國公使ハ印度ニ關シテハスル協定ハ必要モナク全ク事實無根ナリト語レリ土耳其古大使ハ歐洲問題ニ關シ英蘇間ニ協議徐々ニ進行中ナルハ本國政府モ關係國ヨリ内報ニ接シ居ルモ印度及其ノ附近ニ關シテハスルコトハ起ルトハ思ハレス唯支那問題ニ付可能性充分ニアリト語レリ當方面ヨリ見タル日獨協定後ノ英蘇關係ニ付テハ拙信第二號ヲ見ラレ度シ關係大公使へ郵報セリ

支、北平、滿へ轉電シ上海へ轉報セリ

1116 昭和12年4月2日 在ソ連邦重光大使より 佐藤外務大臣宛(電報)

ソ連の対中工作は成果を上げつつあり日本は案観すべきではないとの情報について

モスクワ 4月2日發
本省 4月27日着

郵第二號(極秘)

支那ニ對スル蘇聯ノ畫策ハ苦心探査ニ努メ居ルモ具體的ニ眞相ヲ捕フルノ材料ニ乏シク(「ボロージン」ノ動靜スラ的確ニ判明セス彼ハ當地ニアルカ如シ)唯其ノ表面ニ現ハレタル新聞記事論調等ニ付テ推論スル程度ニ止マル次第ナリ當地ニ於ケル諸々ノ共產大學ニ於テ養成セラルル支那共產黨員ハ年々相當ノ數ニ上リ是等ハ當地ニ於ケル共產黨代表(オウ?)ヲ通シテ支那ニ於ケル活動ノ指令ヲ受ケ其ノ潛勢力ハ相當大ナリト判斷セラル莫斯科ノ指導ハ既ニ赤軍ニ依ル南京政府打倒ニアラスシテ他ノ東洋民族(例へハ蒙古)ニ對スルト同様民族主義ノ實現ニ協力スル即チ民族政策ヲ根

底トシ國民黨トノ合作ヲ遂行スルコトニアリテ以テ英國ノ對支政策ヲ妨ケス且對日反抗ヲ助成セントスルニアリ以上ノ大體ノ方針ニ依リ宣傳其ノ他凡ユル方法ヲ動員シ居ルモノナルコト疑ナク滿洲國ニ於ケル共匪ノ如キハ連日「パールチザン」ノ活動トシテ「タス」ニ報道セラレ居レリ右ハ日獨協定成立以來日本對抗策ノ重要ナル手段トシテ活用セラレ居ルモノナルコト明カナリ蘇側ノ内情ニ精通セル「デュランチー」ト會談ノ機ニ彼ハ支那ニ於ケル蘇側活動ノ有效ナルヲ説キ本使ノ意見ヲ求メタルニ付蔣介石ハ支那ノ愛國者ニシテ日本ニ對抗スル爲ニ赤露ニ國ヲ賣ルカ如キ者ニアラサルヲ答ヘタルニ「デュランチー」ハ蔣介石ハ兎モ角支那ニ於ケル形勢ハ然ラストテ頻リニ之ニ反對シ蘇側ハ支那ニ於ケル活動ニ非常ニ自信ヲ有シ單ニ學生等ノ思想方面ノミナラス政治的ニモ南京政府ヲ抱込ムノ自信ニ滿チ居ル狀況ハ自分ノ蘇側首腦部トノ接觸ニ依リ明カニシテ日本側ハ樂觀ヲ許ササルヘシト述ヘ居レリ何等御參考迄

在歐各大使(土ヲ除ク)、滿ヘ暗送セリ

4 米国およびその他諸国との関係

1118 昭和11年2月6日 在米 齋藤大使より
 広田外務大臣宛

対中財政専門家派遣中止の経緯および米國極東經濟視察団団長の帰国後の言動に関する四國借款団米國代表の内話について

機密公第一〇一號 (接受日不明)

昭和十一年二月六日

在米

特命全權大使 齋藤 博

外務大臣 廣田 弘毅殿

「ラモント」トノ會談報告ノ件

本使紐育出張ノ際二月一日「ラモント」ト會談ノ機會アリタルカ雜誌中言及セラレタル事項中御參考トモ相成ルヘキ點左ニ報告申進ス尙本件談話ノ内容ハ一切他ニ引用セラレサル様特ニ御注意相成度爲念併せて申進ス

「キヤメロン、フオーブス」ハ自分(「ラモント」)ト大學モ同級生ニテ親シク附合ヒ居ルモ近頃同人ハ出來サル相

1117 昭和12年5月4日 在上海吉岡總領事代理より
 佐藤外務大臣宛(電報)

中国共産党やソ連大使館が太平洋集團安全保障条約締結を高唱しているとの情報について

上海 5月4日後発
 本省 5月4日後着

第二〇三號
 貴電合第二六二號ニ關シ

太平洋集團安全保障條約ハ西安事變後ヨリ共産黨側カ日本ノ侵略ヲ防止スル手段トシテ盛ニ其ノ要ヲ強調宣傳シ居ル所ニテ又最近外交部筋ヨリ出テタル諜報ニ依レハ蘇聯邦大使館員等ハ支那側要人ニ對シ之カ宣傳ニ努メ居ル趣ナルカ今ノ所ハ其ノ程度ニ止マリ各方面ニ對シ左シタル反響ナキ模様ナリ

支、北平、天津へ轉電セリ

談ヲ持掛ケ來リ困リ居レリ、ト申スハ外ニモアラス、由來支那ニ經驗少ナキ人カ支那ヲ始メテ研究シ出ス時常に陥ル誤リナルカ、支那ノ杉大ナル領土、夥多ナル人口ニ眩惑セラレ、其ノ將來ノ購買力ニ過大ナル望ミヲ掛ケ、信用ノ問題サヘ都合ヲ附クル時ハ米支貿易發展ノ餘地大ナリトノ誤想ヲ懷キ、「フオーブス」ハ目下 Credit Corporation ノ成立ニ腐心シツツアリ、「フオーブス」ノ案ハ米國ノ支那ニ對スル「オブリゲーション」ヲ「プール」シ又三、四百萬弗ノ運用資金ヲ調達シテ此事業ニ充テムトスルニ在リ、而シテ「モーガン」商會ニ對スル「フオーブス」ノ希望ハ「モーガン」ノ關係シ居ル湖廣鐵道借款ニ關スル「オブリゲーション」及「パシフィック、トレーディング、コンパニー」關係「オブリゲーション」ヲ「プール」セムコトニ在リ、然レトモ余(「ラモント」)ノ見解ヲ以テスレハ此等「オブリゲーション」ハ支那側ノ契約不履行ニ依リ中斷サレ居リ何時再ヒ有效トナルヘキヤ見据付カス又三、四百萬弗ノ運用資金モ今日之ヲ投スル者有之筈ナク結局「フオーブス」ノ計畫ハ成立ノ見込全然無之モノト存ス